

「北塞記畧」訳注 (三)

The annotated translation of Buk-Say-Gi-Lyak (III)

訳者 宮下尚子 (MIYASHITA Naoko)

はじめに

「北塞記畧」とは、朝鮮後期に文臣として堂上官の地位にあり、漢城府右尹、大司諫を歴任した他、慶州府尹、義州府尹、洪州牧史、慶興府使、平安道觀察使を勤めたほか、清康熙帝の時代に冬至使として二度にわたり清国に赴いたという学者としても政治家としても華麗な経歴を持つ洪良浩（字を耳溪と称す、一七二四～一八〇二）の著作のひとつである。「北塞記畧」は朝鮮後期の北方、特に現在の咸鏡道についての歴史および風俗を中心に、豆満江流域、白頭山を越えて、中国東北地区に至るまでの広い地域についての事象を体系的に整理したもので、当時の朝鮮社会における北塞（東北面、主に咸鏡道を指す）への関心や社会認識を反映した書として高い学術的価値を有することは訳者がことさら取り立てて言うまでもない。本書はまた、歴史的な事象だけではなく、言語の面からも咸興道の方言および女真語の記述という点において学術的な価値が認められる。それは、故小倉進平博士の『朝鮮語學史』において次のように評価されている。「朝鮮の學者は古來其の編著せる各種の書中に於て、可なり多數の朝鮮語釋を施したるものも存するけれども、半島各地に行はれる方言の特異性に就き觀察を下した者は極めて少なかつた。次に紹介せる二三の書の如き、固より一篇の随録に過ぎず、方言の研究に多大の貢獻をなすべきものとは信ぜられないけれども、資料に乏しい朝鮮の方言研究に取つては極めて貴重な存在たるを失はない。」しかし、本書は咸鏡道の方言を記述したということで広く知られてきた反面、これまで日本国内におい

て、いつの時代のどういう人物によるどのような書であるのか知られることはなかったのではないか。また、方言以外にも、本書は豆満江、鴨緑江流域の中国（当時は清国）朝鮮国境において清人と朝鮮人の交易が多言語で行われる様や、李朝前期に朝鮮半島北部に生息していた女真人の生態を描写したという点において、朝鮮半島東北地区における言語接触の資料としても高い価値を有する。このことは、朝鮮語学者積年の課題でもある（『河野六郎著作集』第三卷「朝鮮方言學試攷」を参照されたい）。訳者は本書「北塞記畧」の記述を丹念に解釈することによって、幾許かの緒となることを期待するのみである。本書は、これまで訳出紹介してきた「孔州風土記」および本訳「北關古蹟記」のほか、に国境地帯における交易の様子を記録した「交市雜錄」、豆満江以北の清国領の様子を記録した「江外記聞」、「白頭山考」等から成るが、これらについても機会があれば順次訳出し紹介する予定であることを付け加えておく。

北關古蹟記

(一)

【正文】龍堂在慶源府東四十里江邊。有 穆祖舊基。基後峭峰突起。峰頂有老松一株。枝柯盤屈、鱗甲奇古、世傳以爲 聖祖手栽者。太祖與佟豆蘭較射時、亦嘗掛弓於此。按志云。東林城在府東四十里豆江邊。極險峻。內有一大井。太宗元年。使都巡察使姜思德築之。俗傳 穆祖始居于此。自此移幹東。此是龍堂也。城址尚在。井水涓涓不竭。東南北絕壁削立。西有十餘里長谷。村閭櫛比。東望後春部落諸地。

【和訓】龍堂は慶源府の東四十里の江邊に在り。穆祖の舊基有り。基の後に峭峰突起す。峰頂に老松一株有り。枝柯盤屈し、鱗甲奇古なり。世傳以爲らく聖祖の手栽せし者なりと。太祖佟豆蘭と射を較べし時、亦た嘗て弓を此に掛く。志を按ずるに云ふ。東林城は府東の四十里、豆江の邊に在り。極めて險峻にして、内に一つの大井有り。太宗元年、都巡察使姜思德をして之を築せしむ。俗に傳ふ、穆祖始め此に居し、此より幹東に移

ると。此こぞ是れ龍堂なり。城址尚ほ在り。井水涓涓として竭つぎず。東南北に絶壁削立し、西に十餘里の長谷有り、村閭そんりょは櫛比しつひし、東に後春部落の諸地を望む。

【釈語】(朝鮮の地名、人名およびそれらに準ずるものについてはハングルを付した。)

・龍堂(용당) … 『北道陵殿誌』卷之六に「穆祖舊基在慶源府龍堂上 詳見北關十景圖記。龍堂亦十景之一也。」とある。『新增東國輿地勝覽』慶源都護府の項には穆祖舊基および龍堂に関する記載はみられない。

・舊基(옛터) … 旧居の意。『北道陵殿誌』卷之六によると、李氏朝鮮開国の祖である穆祖の旧基は慶源府龍堂、翼祖の旧基は慶興府赤島、度祖の旧基は咸興の松頭里(不詳)、桓祖の旧基は永興府黒石里、太祖の旧基は咸興、永興、開京等の諸地にそれぞれあるという。

・峭 … 高く険しいの意。

・聖祖(성조) … ここでは太祖李成桂を指す。聖祖は一般には清の康熙帝のことを指す。しかし、李成桂(一三三五〜一四〇八)の時代に康熙帝(一六五四〜一七二二)はまだ存在しない。『北道陵殿誌』卷三(英祖三四年、紀元一七五八年)に「手植松。在宮之後庭 太祖潜邸時親自栽植號以松軒者此也(和訓…太祖邸に潜みし時、親しく自ら栽植し號するに松軒を以てする者、此れなり)」とあることから、太祖李成桂を指すと思う。

・穆祖(목조) … 太祖李成桂の高祖父。朝鮮名は李安社。元から遼陽等処行中書省の開元路の幹東(안동、慶興)の豆満江対岸で現在ロシア領)のダルガチに任命された。李成桂が朝鮮を建国すると穆王と追尊し、太宗は廟号を穆祖、諡号を仁文聖穆大王とした。『太祖実録』(一卷総序)には、穆祖(李安社)について次のように記す。

「初在全州。時年二十餘、勇略過人。山城別監入館、因官妓事、與州官有隙。州官與按廉議上聞、發兵圖之。穆祖聞之、遂徙居江陵道三陟縣。民願從而徙者、百七十餘家。嘗造船十五隻以備倭。既、元也窟大王兵侵諸郡。穆祖保頭陀山城以避亂。適前日山城別監、新除按廉使、又將至。穆祖恐禍及、挈家浮海、至東北面

宜州止焉。民一百七十餘戸亦從之、東北之民、多歸心焉。於是、高麗以穆祖爲宜州兵馬使、鎮高原以禦元兵。時雙城以北屬于開元路。元散吉大王來屯雙城、謀取鐵嶺以北、再遣人請穆祖降元、穆祖不得已率金甫奴等一千餘戸降。前此、平壤民聞穆祖威望、多有附者。至是與從之、散吉大喜、禮待甚厚。置盛宴歡飲。將罷、散吉親以玉杯、納諸穆祖懷中曰。公之家人、安知吾二人相與之至情。聊以玉杯表吾情耳。因相與誓曰。自後無相忘也。穆祖乃以族女妻散吉。穆祖由水陸路至時利、其千戸以兵阻之。穆祖語以歸順之意、千戸宴慰甚厚、穆祖亦以牛馬報之。遂至開元路南京之幹東居焉。寔宋 理宗寶祐二年、元 憲宗四年、高麗 高宗四十一年甲寅也。」(和訓…初め全州に在り。時に年二十餘なるも、勇略人に過ぐ。山城別監館に入りて、官妓の事に因りて、州官と隙有り。州官、按廉と議して上聞し、兵を發して之を圖らんとす。穆祖之を聞き、遂に徙りて江陵道三陟縣に居す。民の從ひ徙らんと願ふ者、百七十餘家。嘗て船を十五隻造り以て倭に備ふ。既にして、元の也窟大王の兵諸郡を侵す。穆祖頭陀山城を保ち以て亂を避けんとす。適前日、山城別監、新たに按廉使に除され、又た將に至らんとす。穆祖、禍の及ぶを恐れ、挈家して浮海し、東北面の宜州に至りて焉に止む。民一百七十餘戸、亦た之に從ふ。東北の民、多く歸心せり。是に於て、高麗、穆祖を以て宜州(德源)兵馬使と爲し、高原を鎮め以て元兵を禦がしめんとす。時に、雙城(永興)以北は開元路に屬す。元の散吉大王來りて雙城に屯し、鐵嶺以北を謀取す。再び人を遣はし穆祖に請ひて元に降せしむ。穆祖、已むを得ず金甫奴等一千餘戸を率ひて降す。此より前、平壤の民の穆祖の威望を聞き、附くこと有る者多し。是に至りて與に之に從ふ。散吉大いに喜び、禮待すること甚だ厚し。盛宴を置き歡飲す。將に罷らんとして、散吉親しく玉杯を以て、諸を穆祖の懷中に納めて曰く。「公の家人、安くんぞ吾二人の相與にするの至情を知らん。聊か玉杯を以て吾が情を表わさんのみ」と。因りて相ひ與に誓ひて曰く。「自後、相ひ忘ること無からん。」穆祖乃ち族女を以て散吉に妻らす。穆祖は水陸路に由り時利に至り、其の千戸の兵を以て之を阻まんとす。穆祖の歸順の意を以て語るに、千戸の宴慰すること甚だ厚く、穆祖は亦た牛馬を以て之に報いる。遂に開元路南京の幹東に至り焉に居す。寔れ宋の 理宗寶祐二年、元

の 憲宗四年、高麗の 高宗四十一年甲寅（一二五四年）なり。」

・太祖（대조）…一三三五〜一四〇八（太宗八）。李氏朝鮮の建国者。名は成桂。咸鏡南道永興生まれの武人。射術に長じ、高麗に仕えて咸鏡方面の女真、蒙古諸勢力を平定し、倭寇討伐に大功をあげ、信望を得るに至った。一三三八年明に反抗した高麗政府の遼東侵攻軍が鴨緑江の威化島に到達した際、軍を回して親元派を除き、王を廃位して翌年親明派政府を樹立。土地改革を行い、翌一三九二年推されて五七歳の時に王位につき、国号を朝鮮に改めた。

・佟豆蘭…女真族。本名は豆蘭帖木兒。朝鮮王朝の開国功臣。朝鮮名は李之蘭。『龍飛御天歌』第五十二章に次のようにある。「豆蘭帖木兒고려도란도. 猛安千夫長。則今之千戸也。古論豆蘭帖木兒。即李豆蘭也。後改名之李豆蘭。得興 開国 命功臣之列。太祖當稱曰。豆蘭馳獵之才、人看比者、至於臨陣擊賊、無出其右。（和訓…猛安^{ミヤカ}千夫長。則ち今の千戸なり。古論の豆蘭帖木兒は、即ち李豆蘭なり。後に之を李豆蘭と改名す。興を得て開国功臣之列に命ぜらる。太祖當稱して曰はく、豆蘭馳獵の才、人の比^なぶ者を看るに、陣に臨み賊を撃つに至りては其の右に出る無し。）」また、『東國輿地勝覽卷之四十九（北青）』第二四頁に次のようにある。「李之蘭。初名豆蘭帖木兒。事我 太祖。爲開國功臣門下侍郎贊成事。封青海君。諡襄烈。配享 太祖廟庭。（和訓…李之蘭。初名豆蘭帖木兒。我が太祖に事ふ。開國の功臣門下侍郎贊成事たり。の爲に青海君に封ぜらる。諡は襄烈。太祖廟庭に配享せらる。）」『海東名將列傳』（卷四）李之蘭の項によると、女真族千戸阿羅不花の息子。咸鏡道一带に住んでいた女真族の出身である。咸鏡道は新羅、高麗の領土となったことはなく女真族の居住地であったが、この時代より高麗の影響下に入り、之蘭は配下を率いて帰化し北青に住した。李成桂と出会ひ、弓術の腕比べから義兄弟の契りを結び李氏に改姓したとされる。以後は成桂の側近として数々の戦闘で補佐し、李氏朝鮮建国では開国功臣の称号を得る。晩年は成桂の退位後の隠棲に付き従ひ、また、数多の命を殺めた事を悔いて仏門に帰依した。李成桂の死後には、太祖宗廟に功臣として陪祀された。青海李氏の祖である。

・志…歴史の記載、歴史書。

・姜思德(강사덕)…生年不詳一四一〇。朝鮮時代の武臣。太祖六(一三九七)年、藍浦鎮の僉節制使を経て、太宗の時代に東北地区の都巡問使、吉州道都安撫察理使、刑曹、典書、右軍摠制、全羅道兵馬都節制使、慶尙道都節制使、判承寧府事を歴任した。慶尙道、全羅道の海岸に出没していた倭寇を防禦する等の功績が多かったが、太宗九(一四〇九)年、尹穆等の謀反に加担したとして寧海へ流刑に処され、翌年処刑された。

・幹東…『東國輿地勝覽』(卷之五十 慶興)(第四六頁)に「幹東。穆祖自德源移居于此。在府(訳注…慶興都護府)東三十里(和訓…幹東。穆祖、德源自り此に移居す。府の東三十里に在り)」のようにある。(五)「幹東」の記載および訳語も参照。

・村間そんりよ…村の入り口の門、またはむらざと。

・櫛比しひ…櫛の歯のように細かくびつしり並ぶ。

・後春(후춘)…地名。現在の琿春(吉林省延辺朝鮮族自治州内)か。『北塞記畧』「江外記聞」に「琿春部落。在慶源江北十餘里。俗呼爲後春。」とある。土名(女真語名)を大八屯ともいい、豆満江の支流紅旗河(琿春河)の西岸にある。金代には烏庫哩部といい、院には琿春衛、密札衛をおいたが、清初一般の移住を禁じた。しかし、ロシア、朝鮮との国境に近く物資の交流がさかに行われ、一八八一(光緒七)年に琿春副都統をおき、翌年琿春府にあらためることになった。

【現代語訳】龍堂は慶源府の東四十里の江のほとりにあり、鴨緑江辺に穆祖の旧居がある。その後ろに高く険しい峰があり、峰の頂きに老松が一株ある。枝は複雑に入り組み、樹皮は年月を経てたいへん珍しい。聖祖太祖李成桂が手ずから植えたもので、朝鮮の太祖李成桂と腹心の友佟豆蘭がかつて弓比べを行った折も、ここに弓を立てかけたと言ひ伝える。歴史の記載を調べると、東林城は慶源府の東四十里の豆満江辺にある。たいへん地形の厳しいところで、城の中に大井戸が一つある。太宗元年に、都巡察使の姜思德にこれを築かせたのである。穆祖ははじめはここに住んでおり、ここから幹東に移ったのだと言ひ伝える。これこそが龍堂である。

城跡は現在も残っており、井戸の水もこんこんと尽きる事がない。東南北には絶壁が鋭く削ったように立っており、西には十数里にわたって長い谷がある。村里はびつしり並び、東には後春部族の諸地を望む事ができる。

(二)

【正文】 赤池在慶興府南十里。周十餘里。是度祖射龍處。一名射龍淵。建亭于池畔。名曰射龍臺。池上有古城。甚危嶮。

【和訓】 赤池は慶興府の南十里に在り。周は十餘里なり。是れ 度祖の龍を射ちし處なり。一名射龍淵なり。亭を池畔に建つ。名づけて射龍臺と曰ふ。池上に古城有り。甚だ危嶮なり。

【釈語】

・赤池…『龍飛御天歌』第五十二章の註に次のようにある。「慶興府南十二里許赤池^{ハカリ}吳平中。有圓峯高三十五步。圍九十步許。四面沮洳。人未易通行。穆祖德陵在峯上。於其葬也（和訓…慶興府南十二里許赤池^{ハカリ}吳平中に圓峯有り。高さ三十五步。圍は九十步許なり。四面沮洳。人未だ通行の易からざるなり。穆祖の德陵は峯上に在り。其に於て葬るなり。）」『新增東國輿地勝覽』（卷之五十 慶興）（第四四頁）によると「赤池。在府南十里。周數里。北連豆滿江。諺傳。度祖射黑龍之淵（和訓…赤池。府南十里に在り。周數里。北は豆滿江に連る。諺に傳ふ。度祖黑龍を射つの淵なり。）」のようにある。

・慶興（경흥）…『新增東國輿地勝覽』（卷之五十 慶興）（第四四頁）に「古孔州之地。慶源府既移治於會叱家。世宗以距孔州古地隔遠。難於守禦。復修孔州舊城。差萬戶兼孔州等處。（和訓…古の孔州の地なり。慶源府は既に會叱家に移り治む。世宗、孔州の古地より隔つこと遠く、守禦に難きを以て、孔州舊城を復修す。萬戶を差（配）し孔州等を兼ねし處なり。）」のようにある。

・度祖（도조）…本名李椿。朝鮮王朝初代国王太祖李成桂の祖父。生年不詳く至正二（一三四二）年。咸鏡府松頭里に生まれる。至正二年（一三四二）元の千戸長。モンゴル名は李顔帖木儿（ブヤンテムル）。『太祖実録』

総序には「度祖諱椿。小字善來。蒙古諱李顔帖木兒。受宣命襲職（和訓…度祖、諱は李椿。小字（幼名）は善來。蒙古諱（モンゴル名）は李顔帖木兒。宣命を受け職（父の官職—ダルガチ）を襲ぐ」とある。

・古城（고성）…城壁に囲まれた古い町の意か。『新增東國輿地勝覽』（卷之五十 慶興）（第四七頁）に「赤池古城。在赤池上。甚危険（和訓…赤池古城。赤池の上に在り。甚だ危険なり）」とあるのはこの「古城」を指すものであろう。

【現代語訳】赤池は慶興府の南十里にある。周囲は十余里である。ここは度祖が龍を射た場所であり、一名を射龍淵ともいう。亭を池畔に建て、射龍台と名付けている。池のほとりには古城があり、たいへん危険である。

(三)

【正文】赤島在府南五十里。蘆丘山海中十里、周回七八里。石色皆赤、狀如伏龜。中有翼祖陶穴遺址。產異草。紫葉翠莖、味辛而有香。名曰紫芝。自生自茁。甘泉出巖石間。四時不渴。民犯薪樵。輒致風雨。故草木暢茂。

【和訓】赤島は府南の五十里に在り。蘆丘山は海中十里にして、周回七八里。石色は皆な赤にして、狀は伏したる龜の如し。中に翼祖陶穴の遺址有り。異草を産す。紫の葉、翠の莖、味は辛く香り有り。名を紫芝と曰ふ。自ら生へ自ら茁ず。甘泉巖石の間より出づ。四時渴れず。民薪樵を犯せば、輒風雨を致す。故に草木暢茂せり。

【釈語】

・赤島（불고섬）…翼祖の舊基があるとされる地名。「赤島 在慶源府東六十餘里」（『龍飛御天歌 卷一』第八頁の註より）。翼祖（李行里）は至元十一年（一二七四年）に父が死去するとダルガチの地位を受け継いだ。しかし、女真と対立して奇襲を受け、豆満江の河口近くにある赤島に逃れた。この故事は『龍飛御天歌』卷之一第三章をふまえており、同様の故事が『新增東國輿地勝覽』（卷之五十 慶興）（第四六頁）「赤島」に次のようにある。

赤島。在府南四十里。周十二里。穆祖在幹東。每至女眞千戸所。彼必宰牛馬饗宴累日。諸千戸至幹東、穆

祖亦如之。遂數相宴會。翼祖承襲亦如之。後翼祖威德漸盛。諸千戶手下之人皆歸心。諸千戶忌而謀害之。乃謬告白。吾等將獵北地而來。請停會二十日。翼祖許之。過期不來。翼祖親往奚關城。道見一老嫗戴水桶、手持一椀而來。翼祖渴欲飲。老嫗洗椀盛水以進。因言曰公。不知乎。此處之人。實因請兵而去。貴官威德可惜。吾不敢不告。翼祖邊遽而返。使家人乘舟。順豆滿江而下。期會赤島。自與孫夫人至慶興後岨。望見幹東至野。賊騎彌滿。先鋒三百餘人。幾及之。翼祖與夫人。走馬至海岸。自岸至赤島。水廣可六百步。本無潮汐。深不可渡。所期之舟亦未至。無如之何。忽水退。唯百餘步未渴。翼祖與夫人。共騎一白馬而涉。從者畢涉。水復大至。賊至不得渡而去。北方之人。至今稱之曰。天之所造。非人力也。翼祖遂陶穴而居。其甚至今存焉。幹東之人聞翼祖在赤島。皆歸焉。後翼祖還居德源府。(和訓…赤島府南四十里に在り。周は十二里。穆祖の幹東に在りて、女眞千戶の所に至る毎に、彼れ必ず牛馬を宰し饗宴すること累日なり。諸千戶幹東に至るや、穆祖も亦た之の如し。遂に數相ひ宴會す。翼祖承襲すること亦た之の如し。後に翼祖の威德漸盛す。諸千戶の手下の人、皆な歸心す。諸千戶、忌みて之を害さんと謀る。乃ち謬きて告げて白す。吾等將に北地に獵して來らんとす。請ふ會を二十日停められよ。翼祖之を許す。期を過ぐるも來らず。翼祖親しく奚關城に往く。道に一老嫗の水桶を戴き、手に一椀を持ちて來るを見る。翼祖渴し飲まんと欲す。老嫗椀を洗ひて水を盛り以て進む。因りて公に言ひて曰く。知らずや。此の處の人、實は兵を請ふに因つて去る。貴官は威德惜しむ可し。吾れ敢へて告げずんばあらず。翼祖邊遽(邊疆の駅添いに警報を發すこと)して返る。家人をして舟に乘らしめ、豆滿江に順ひて下り、赤島に會せんことを期す。孫夫人と慶興に至りて自り後に岨(岨)す。望見すれば幹東野に至り、賊の騎彌滿す。先鋒三百餘人。幾んど之に及ばんとす。翼祖夫人と馬を走らせ海岸に至る。岸より赤島に至る。水の廣きこと六百步ばかり。本は潮汐無きに、深くして渡るべからず。期する所の舟も亦た未だ至らず。之を如何ともする無し。忽ち水退く。唯だ百餘歩にのみなるも未だ渴れず。翼祖と夫人、共に一白馬に騎して涉る。從ふ者涉り畢へるや、水復た大ひに至る。賊至るも渡るを得ずして去る。北方の人、今に至

るも之を稱して曰ふ。天の造る所にして人力に非ざるなりと。翼祖遂に穴を陶して居す。其の基、今に至るも焉に存す。幹東の人、翼祖の赤島に在りと聞き、皆な焉に歸す。後に翼祖還りて徳源府に居す。）

・蘆丘山（エゴ山）…不明。

・翼祖陶穴遺址…右「赤島」の項、もしくは『龍飛御天歌』第四章を参照。『龍飛御天歌 一』（第三章第九葉）に「翼祖遂陶穴而居。其基至今存焉」とある。「陶穴」とは土に穴を陶して（掘って）住居することと理解する。

【現代語訳】赤島は慶興都護府の南五十里に在る。蘆丘山は海中を十里進んだところにあり、周囲七、八里ほどである。赤島の石の色は全て赤く、形状は亀が伏しているようである。赤島の中には翼祖が女真から奇襲を受けた際に夫人とともに逃亡して海を渡りたどり着いたとされる伝説の陶穴の遺址が有る。島には珍しい草が生えており、葉は紫、茎は緑で、味は辛く香りがある。紫芝という名である。自生している。また、おいしい水の泉が巖石の間からわき出しており、絶えることがない。民が薪にする木を取りに来ると、その度に風雨がもたらされるため、草木が茂って盛んである。

（四）

【正文】舊德陵。穆祖寢園。舊安陵。孝妃寢園。初在幹東地香角峰之陽。陵之左山腰稍低。鑄鐵爲龍埋之。以補地脉云。太祖四年。移奉于慶興府南十五里。四野下濕洳淖。中起小阜。無來脈。堪輿家謂之沒泥龜。二陵相望可數里。皆前臨豆江。土人謂之陵坪。太宗十年、以地隣女眞。又移奉于咸興府。

【和訓】舊德陵、穆祖の寢園なり。舊安陵、孝妃の寢園なり。初め幹東の地、香角峰の陽に在り。陵の左は山腰の稍低し。鐵を鑄し龍を爲り之を埋む。以て地脉を補ふと云ふ。太祖四年、移して慶興府の南十五里に奉ず。四野、下濕して洳淖たり。中に小阜起ちて、脈の來ること無し。堪輿家之を沒泥龜と謂ふ。二陵の相ひ望むこと數里ほど。皆な前に豆江を臨む。土人之を陵坪と謂ふ。太宗十年、地の女眞に隣すを以て、又た

移して咸興府に奉ず。

【釈語】

・舊德陵・舊安陵…『新增東國輿地勝覽』(卷之五十 慶興) 第四六頁に次のようにある。「古安陵。古德陵。在府(訳者注…慶興都護府)城南十里。有兩圓峯。南安陵北德陵。太宗十年。移安于咸興府。俗謂之陵坪。」「新增東國輿地勝覽」(卷之四十八 咸興) 第一四頁に次のようにある。「我 穆祖仁文聖穆祖大王及恭孝王后陵同塋。在府西北六十里。舊在慶興府城南。太宗十年。同時遷于此。」また、『太宗實錄』一九卷一年(一四一〇年)二月一〇日(丁未)に女真族の跋扈する慶源より二陵を鏡城へ移して慶源を廢郡する決議が議政府においてなされたとの記録が残る。

・洶^{じゅう}…ひたる、うるおう、水気が多くてじめじめした土地

・淖^{だう}…どろ、ぬかるみ、ぬれる

・寢園…御陵の意。

・堪輿家(간요가)…地師とも言う。墓所の地誌を掌握することを専門とする者。風水家とも言う。

・沒泥龜(몰니귀)…泥の中の亀、という意味である。「沒」は高麗の言語で「水」を意味したという(『諸橋大漢和辞典』)。墳墓の地形、形状に関する風水の用語。

・咸興府…咸興都護府。咸鏡道の主要都市。穆祖肇基の地であるため郡を経て都護府に格上げされたが、李施愛の乱に加担した李仲和の出身地であるため、成宗元年(一四七〇年)府から郡へ格下げされた。

【現代語訳】 舊德陵は穆祖の御陵である。舊安陵は孝妃(穆祖王妃)の御陵である。当初は初め幹東の地、香角峰の南側にあった。陵の左の山腰が稍低^{やや}かったため鉄を鑄して龍をつくりこれを埋めた。これにより地脉を補ったのだという。太祖四年(一三九六年)、御陵を慶興府の南十五里に移した。周りは湿って水気が多く泥溼^{ぬし}んでいる。御陵の中に小さな隆起があるため、脈が来ない。墓所の地誌および風水を見る者がこれを「沒泥龜」と言っている。二陵は数里を隔ててお互いに向かい合っている。どちらも前に豆満江の流れる位置にある。

庶民は穆祖の御陵を指して陵坪と言うそうである。太宗十年、女真の土地と隣り合ったため、女真が近隣まで攻めてきたので、再度陵を咸興府に移して奉じた。

【解説】 徳陵に関しては『太祖実録』第一巻総序に次のような記述がある。「至元元年甲子五月。欽受宣命、仍充幹東千戸句當。至元十一年甲戌十二月薨、葬于孔州城南五里、後遷葬于咸興府之義興部 韃靼洞即徳陵。」(和訓…至元元年(一二六四年)甲子五月。宣命を欽受し、仍ち幹東千戸の句當に充つ。至元十一年甲戌十二月薨る。孔州城の南五里に葬る。後に咸興府の義興部、韃靼洞に遷葬す。即ち徳陵なり。)

(五)

【正文】 幹東。蕃音烏東。在府東北三十里。有山。曰黒角峰。峰下有村曰金塘。即穆祖舊居。自龍堂移居于此。今係江外。

【和訓】 幹東。蕃音は烏東。府の東北三十里に在り。山有り。黒角峰と曰ふ。峰下に村有りて金塘と曰ふ。即ち穆祖の舊居たり。龍堂自り移りて此に居す。今は係れ江外なり。

【釈語】

・幹東 (알동、龍飛御天歌』卷之第一では「오동」と表記さる) …幹朵とも。女真語の俄朵里 (Q-tu-li、都城の意) に由来する地名である。現在の北朝鮮咸鏡北道恩徳郡、モンゴル帝国の時代には遼陽行省開路に属す。高麗高宗四一(一二五四)年、高麗宜州(現在の江原道元山市)兵馬使李安社がモンゴルに帰順。翌年、モンゴル帝国第四代皇帝モンケが幹東千戸所を設置し、千戸兼ダルガチを授け、南京(原渤海国南京、現在の北朝鮮咸鏡南道北青郡)等の地五千戸所を与えた。フビライは中統二(一二六一)年、幹東千戸所に銅印を授けた。李安社の子の李行里、孫の李顔帖木儿(李椿)、曾孫の塔思不花(李子春の同母兄、李子興)および吾魯思不花(李子春)、祖孫四代を世襲の幹東千戸所の千戸とした。しかし、元順帝、至正一六(一二三六)年、高麗により元双城総管府は占領され、吾魯思不花(李子春)は高麗に帰順し、幹東千戸所

は廃置された。

・蕃音・モンゴル語。(女真語は「土語」と表記。)

【現代語訳】 幹東。モンゴル語で烏東と言う。慶興府の東北三十里に在る。黒角峰のふもとに村が有り、金塘と言う。穆祖の旧居である。穆祖は龍堂からここに移り住んだという。今は豆満江外になつてゐる。

(六)

【正文】 尹侍中、逐女眞。收復舊疆。其地方三百里。東至于大海。西北介于蓋馬山。南接于長定二州。新置六城。一曰、鎮東咸州大都督府。兵民一千五百四十八丁戸。二曰、安寧軍英州防禦使。兵民一千二百三十八丁戸。三曰、寧海軍雄州防禦使。兵民一千四百三十六丁戸。四曰、吉州防禦使。兵民六百八十丁戸。五曰、福州防禦使。兵民六百三十二丁戸。六曰、公嶮鎮防禦使。兵民五百三十二丁戸。

【和訓】 尹侍中の女眞を逐ひて、舊疆を收復す。其の地方は三百里なり。東は大海に至り、西北は蓋馬山に介す。南は長定二州に接す。新たに六城を置く。一に鎮東咸州大都督府と曰ふ。兵民一千五百四十八丁戸。二に安寧軍英州防禦使と曰ふ。兵民一千二百三十八丁戸なり。三に寧海軍雄州防禦使と曰ふ。兵民一千四百三十六丁戸なり。四に吉州防禦使と曰ふ。兵民六百八十丁戸なり。五に福州防禦使と曰ふ。兵民六百三十二丁戸なり。六に公嶮鎮防禦使と曰ふ。兵民五百三十二丁戸なり。

【釈語】

・尹侍中(윤시중)・・尹璫(윤관)。高麗中期の武將。高麗時代、女真族は咸鏡道から豆満江流域や北方の黒龍江、松花江流域に居住していた。大多数の女真族は遊牧生活をしていたが、咸鏡道の海岸地域や豆満江流域一帯には農業に従事する部族が住んでいた。やがて、女真族の完顔部が勢力を増し、摩天嶺以南、定平以北の曷懶甸地域を襲つて高麗に服属していた女真族の村落を占領し、定平以南に出没するようになった。肅宗は女

真征伐のために林幹に続き尹瓘を出動させたが退敗し、定平以北の女真族村落はすべて完顔部の治下に入ることとなった。睿宗は肅宗の遺志を受け継いで女真征伐を發し、肅宗二年(一一〇七)、尹瓘を元帥とする一七万の大群に女真を攻めさせた。尹瓘率いる高麗軍は大勝し、一三五の村落を占領し、五〇〇〇名を捕虜にした。尹瓘は占領した咸州をはじめ、英州、雄州、吉州、福州、公陝嶺、通泰鎮、崇寧鎮、真陽鎮などの九城を築き、南方からの六九〇〇〇戸余りを移住させた。また、土門江七〇里の地に先春嶺の碑を立てて境界を定めた。しかし、高麗は、開拓した九城の維持に莫大な物資を必要としたために、開城から一年あまりで九城を放棄し、駐屯していた兵士を撤収させたため、土地は再び女真族の支配下に置かれた。

【現代語訳】尹侍中、すなわち尹瓘が女真を朝鮮半島の東北部より駆逐して、辺疆の旧領土を回復した。その土地は四方が三百里もあり、東は大海に至り、西北は蓋馬山にかかり、南は長州および定州の二州と接している。旧領回復にともない、新たに六城を置いた。ひとつは鎮東咸州大都督府と言う。兵民一五四丁戸を擁する。ふたつめは安寧軍英州防禦使と言う。兵民一千二百三十八丁戸を擁する。三つめは寧海軍雄州防禦使と言う。兵民一千四百三十六丁戸を擁する。四つめは吉州防禦使と言う。兵民六百八十丁戸を擁する。五つめは福州防禦使と言う。兵民六百三十二丁戸を擁する。六つめは公嶺鎮防禦使と言う。兵民五百三十二丁を擁する。

(七)

【正文】古雄州、尹瓘逐女真於大串嶺下。築城廊九百九十二間。置寧海軍雄州防禦使。翌年撤城。還其地於女真。恭愍收復。恭讓二年、併于吉州。麗史云。吉在北。雄在南。今未詳其地。

【和訓】古雄州。尹瓘女真を大串嶺下に逐ふ。城廊九百九十二間を築き、寧海軍雄州防禦使を置く。翌年城を撤し、其地を女真に還す。恭愍收復す。恭讓二年、吉州に併す。麗史に云ふ。吉は北に在りて、雄は南に在り。今未だ其地を詳らかにせず。

【釈語】

・大串嶺 (대곶령) …大串梁とも。『新增東國輿地勝覽』(卷之四十三、黃海道長淵縣) に「大串梁…在懸南六十三里。吾又浦古營地」とあり。

・恭愍…恭愍王 (一三三〇～一三七四年、在位一三五一～一三七四年)。第三一代高麗王。忠肅王の子。姓は王、名は祺。蒙古名は伯顔帖木兒 (フヤンテルム)。母は高麗人の明德太后洪氏、忠惠王の同母弟。幼少時は元の宮廷で育つ。妃は元の魏王女、魯国大長公主宝塔失里。元は幼君が続く高麗の政情を危ぶみ、その支援を背景にして即位した。しかし、元の衰えと明の台頭を見て、親明政策を取り始めた。まず、高麗国内の親元勢力を排除して、元の外戚として權勢を振るう奇氏 (奇皇后、順帝トゴン・テムルの皇后の実家) を討ち、次に軍備を増強した。李成桂をはじめとする武人を登用し、元に奪われた領地の奪回を果たした。また一〇〇年以上続いた胡服弁髪令をも廃止した。一三六八年、中国で明朝が成立し、元が北走すると、恭愍王は明に属することを表明したが、親元派の宦官に殺された。恭愍王の治世は、衰退する元から独立し、台頭してきた明に属する親明政策をとった。これが親元派の暗殺を呼び込み、続く王禕の世では親元派が政權を握った。彼の治世に將軍として元討伐や倭寇討伐で活躍した李成桂は、続く王禕、王昌を殺して王位に就き、次の李氏朝鮮王朝を築き上げた。

・恭讓…恭讓王 (一三四五～一三九四年、在位一三八九年～一三九二年)。高麗第三四代国王。はじめ定昌府院君に封じられていたが、李成桂により高麗王として擁立された。後に李成桂に讓位し、李成桂の命で子供とともに殺された。

【現代語訳】 古雄州。高麗の時代、尹瓘が女真を大串嶺下へと驅逐した。九百九十二間の城廊を築き、寧海軍雄州防禦使を置いたが、翌年、城は撤収し、その地を女真へと還した。高麗の恭愍王が領土を收復した。高麗恭讓王二年の時に雄州を吉州に併合した。高麗史に「吉は北に在り、雄は南に在る」というが、その正確な場所は今に至ってもまだ明らかではない。

(八)

【正文】古英州。尹瓘於蒙羅骨嶺下、築城廊九百九十間。置安寧郡英州防禦使。翌年、與雄州、同時撤。還女眞。後收復。併于吉州。今未詳其地。

【和訓】古英州。尹瓘蒙羅骨嶺下において城廊九百九十間を築く。安寧郡英州防禦使を置く。翌年、雄州と同時に撤し、女眞に還す。後に收復し、吉州に併す。今未だ其地を詳らかにせず。

【現代語訳】古英州。尹瓘が蒙羅骨嶺下で九百九十間にわたる城郭を築いた。安寧郡英州防禦使を置いたが、翌年、雄州と同時に撤収し、その地は女眞のものへと戻った。後に再び收し、吉州に併した。その地（英州）がどこにあるかは今でもまだつまびらかにできていない。

(九)

【正文】公嶮鎮。自高嶺鎮。渡豆滿江。踰古羅耳。歷吾童站。英哥站。至蘇下江。江濱有公嶮鎮古基。南鄰貝州探州。北接堅州。按高麗史地理志。公嶮鎮。睿宗三年。築城置鎮。爲防禦使。六年。築山城。一云孔州。一云匡州。一云在先春嶺東南。白頭山在北。一云在蘇下江邊。今以慶源爲孔州。則恐在先春嶺東南、白頭山東北、蘇下江邊者爲是。然未可考。

【和訓】公嶮鎮。高嶺鎮より、豆滿江を渡り、古羅耳を踰へ、吾童站、英哥站を経て、蘇下江に至る。江濱には公嶮鎮の古基有り。南は貝州探州に鄰し、北は堅州に接す。高麗史地理志を按ずるに、公嶮鎮は、睿宗三年。城を築き鎮を置き、防禦使と爲す。六年。山城を築く。一に孔州と云ふ。一に匡州と云ふ。一に先春嶺の東南に在り、白頭山は北に在りと云ふ。一に蘇下江邊に在りと云ふ。今、慶源を孔州と爲すを以てすれば、則ち恐くは先春嶺の東南、白頭山の東北、蘇下江邊に在る者、是れ爲り。然れども未だ考ふる可からず。

【釈語】

・公嶮鎮…尹璫が睿宗の名を受け女真族の村落を占領した際に築いた九城の一つ。本文にもあるように、当時公嶮鎮の所在は不明だったが、現在も分かっている。次(二〇)の「九城」の項を参照のこと。

・白頭山…「茂山の西方約三十六里にあつて、豆滿江、松花江、鴨綠江の分水嶺を爲し又本道、咸鏡南道、間島の境界にある朝鮮最高の大山で、不咸、盖馬、太白、徒白、長白等の別名がある。今は休火山なれど山頂に近き處は數尺の小泡石あり、草木を生ぜぬ。此處より遠ざかるに従がつて灌木繁茂して居る。(中略)頂上に大澤ありて天地又潭と稱して居る、周圍約一里、深さ測り知ること出来ない。水清くして深藍色を呈してゐる、其の周圍に十二の峻峯千仞の絶壁をなし、凄絶殆ど名状すべからざる程である。其北方の缺陷から池水溢れて松花江の源をなしてゐる。定界碑は即ち其の下にあるので、元と此の源流を土們江と稱して清韓の境界を定めたのである。」(『咸北要覽』一四四頁より抜粋)。

・江…豆滿江を指す。

【現代語訳】公嶮鎮。高嶺鎮から豆滿江を渡り、古羅耳を通り、吾童站、英哥站を経て、蘇下江にたどり着く。蘇下江の濱辺には公嶮鎮の古基が有り、南は貝州、探州であり、北は堅州に接している。高麗史地理志から考えてみると、公嶮鎮は睿宗三年に城を築き鎮を置いて防禦使としたのである。睿宗六年には山城を築いた。これを一説には孔州だと言ひ、あるいは匡州だとも言ふ。一説には先春嶺の東南に在り、白頭山はその北に在る。また一説には蘇下江辺に在ると言ふ。今、慶源をかつて孔州と言つたのから判断すれば、恐らく先春嶺の東南、白頭山の東北、蘇下江辺に位置するのがその場所であらう。しかし、また考察する材料がない。

(二〇)

【正文】宣化、通泰、平戎、崇寧、眞陽諸鎮。亦九城之五鎮。而今其地似在江外。未可考。

【和訓】宣化、通泰、平戎、崇寧、眞陽諸鎮も亦た九城の五鎮なり。而るに今は其の地は江外に在るに似る。未だ考ふべからず。

【釈語】

・九城…睿宗二年（一一〇七）、睿宗の命を受け、尹瓘を元帥とする一七万の大軍が東女真を攻めた際に築いた城。咸州、英州、雄州、吉州、福州、公嶮鎮、通泰鎮、崇寧鎮、真陽鎮の九城に南方から約七万戸を移住させた。九城の位置については定説がなく、公嶮鎮の位置を豆満江以北とすることでそれ以南の咸鏡道全土であるとする説、咸州（咸興）一帯とする説、咸鏡南道一帯とする説などがある。高麗が開拓した九城はそれほど長くは維持できなかった。農耕地を奪われた土着の女真族は反撃戦を展開しながら、外交的方法によつて九城を返還するよう高麗政府に求めて来た。高麗は九城の維持に莫大な物資を必要とし、人命被害も続出したため、ついに開拓から一年あまりで九城を放棄し駐屯していた軍士および一般人をすべて撤収させた。その後女真族は勢力を拡大し、一一一五年には金国を建国し、一二二五年に契丹を滅ぼしたのに続き、一二二七年には開封に攻め入つて宋室を中絶させ、名実ともに中原の覇者として君臨した。（『韓国歴史地図』七五頁および『東洋史辞典』一七七頁より抜粋）。

【現代語訳】 宣化、通泰、平戎、崇寧、真陽諸鎮もまた古の九城のうちの五鎮である。だが今は、これらの地は豆満江以北に在るかのようである。五鎮の正確な所在地については未だはっきりと考察できない。

(一一)

【正文】 吉州古號海洋。有三海洋焉。龍飛御天歌註云。自海洋北行五十里。至兌神。自兌神行六十里。至山城院。今廢。

【和訓】 吉州は古く海洋と號す。三海洋有り。龍飛御天歌の註に云ふ。海洋より北に行くこと五十里、兌神に至る。兌神より行くこと六十里、山城院に至る、と。今は廢す。

【釈語】

・吉州…『龍飛御天歌』第五十六章註に次のようにある。「吉州。古號三海洋。久爲胡人所據。高麗大將尹瓘

逐胡人。於弓漢村築城郭。號吉州。 本朝 太祖七年。改吉州牧。古州治在西之委。今徙夫瑞平。南距舊治四十里。其山鎮曰圓山。別號雄城。咸吉道界有官也。所領。郡三縣一。吉州。堀。即西之委也。」(和訓…吉州。古くは三海洋と號す。久しく胡人の據る所と爲る。高麗の大將尹瓘胡人を逐ひ、弓漢村に於いて城郭を築き、吉州と號す。本朝太祖七年、吉州牧と改む。古く、州治は西之委に在り。今は夫瑞平に徙る。南は舊治と距つこと四十里。其の山鎮を圓山と曰ふ。別號は雄城なり。咸、吉道界に官有るなり。領する所は、郡三、縣一なり。吉州の堀は、即ち西之委なり。) また、『世宗實錄(地理志 咸吉道)』に次のようにある。「吉州。牧使一人。以兵馬都節制使兼之。判官一人。兼吉州道中翼兵馬。古號三海洋。久爲野人所據。高麗睿宗丁亥。元帥尹瓘、副元帥吳延寵率兵十七萬逐女眞、分遣將軍、畫定地界。東至火串嶺。北至弓漢嶺。西至蒙羅骨嶺。以爲我疆。(和訓…吉州。牧使は一人。兵馬都節制使を以て之を兼ねさしむ。判官一人。吉州道中翼兵馬を兼ねる。古くは三海洋と號す。久しく野人(訳注…女眞)の據る所と爲る。高麗睿宗丁亥。元帥尹瓘、副元帥吳延寵兵十七萬を率ひ女眞を逐ふ。將軍を分遣し、地界を畫定す。東は火串嶺に至り、北は弓漢嶺に至る。西は蒙羅骨嶺に至り、以て我疆と爲せり。)」

・海洋…後出『龍飛御天歌』第五十三章註に次のようにある。「海洋^{고려}연。猛安括兒牙火失帖木兒^{아릿타물}말^말○海洋。地名。在今吉州。自海洋北行五十里至秦神^{다신}다신。自秦神東行六十里至的遏發^{타발}타발。海洋。秦神。遏發。三處。各有猛安。其俗謂之三海洋。」つまり、猛安の所轄する「海洋」「奉神」「遏發」をまとめて「三海洋」のように呼び習わしたということであり、「海洋」が三力所あったということではない。

・龍飛御天歌…朝鮮の李朝建国叙事詩。一四四七年刊。木版本。一〇卷。一二五章から成る。初章一聯、終章三聯以外は二聯で、対になったハングル歌の後に漢詩訳ならびに語彙注釈がはさまれた形式で続く。朝鮮李朝の穆祖、翼祖、度祖、桓祖の威徳と、太祖、太宗の開国偉業を讃頌した歌。前聯は中国の故事、後聯は朝鮮の事跡を対にすることにより、朝鮮建国の正当性を主張する。世宗以前の六代祖の事跡を述べるが、太祖(李成桂)に最も詳しい。一一〇章以降は後代の王への訓誡。ハングル(一四四六年訓民正音として制定)

による最初の資料である。注は漢文で書かれて長く、高麗末から李朝初期にかけての朝鮮北部および中国東北部、日本に関する記事も見られる。

・兌神…『龍飛御天歌』では「泰神 타신」と作る。

【現代語訳】吉州は古くは海洋（または海陽）と言った。猛安ミンガンの所轄する海洋、兌神（または泰神）、遏發という三つの地方があることに由来する。龍飛御天歌の註では次のように言う。海洋より北に五十里行くと兌神に至る。兌神より六十里行くと山城院に至る、と。今は廢されている。

【解説】『新增東國輿地勝覽』（卷之五十 吉城縣）第八頁「吉城縣」の項に以下の記載がある。内容は『龍飛御天歌』『李朝實錄』の「吉州」項目とほとんど同じである。「本高句麗舊地。久爲女眞所據。高麗睿宗二年。遣尹瓘、吳延寵。率兵十七萬逐女眞。畫定地界。東至火串嶺。北至弓漢嶺。西至蒙羅骨嶺。以爲我疆。於弓漢村築六百七十間號吉州。三年置防禦使。六年築中城。尋以地還女眞。後沒於元。稱海洋。一云三海洋。龍飛御天歌註。海洋地名。今在吉州。自海洋北行五十里。至泰神。自泰神東行六十里。至的遏發三處。各有猛安。其俗謂之三海洋。（以上の内容は正文とほぼ同じにつき、和訓は省略する）」

(一一)

【正文】多信山城。在州南三十一里。號曰江城。內有十池。舊有軍倉。積穀甚多。施愛兵敗。焚之而去。又有石城。今廢。古稱吾布城。

【和訓】多信山城。州南三十一里に在り、號して江城と曰ふ。内に十池有り。舊くは軍倉有りて積穀甚た多し。施愛、兵敗れしとき、之を焚たきて去にく。又た石城有り。今は廢す。古くは吾布城と稱す。

【釈語】

・多信山城…「吉州の南約三里、江城とも稱する、周圍一萬五千七十五尺、高さ十六尺の石築で、場内に十池あり、其の山下にも石城がありて周圍二千八百五尺、俗に吾布城と稱する。」（『咸北要覽』一三七頁より引

用)。

・施愛・李施愛(？一四六七)。朝鮮、李氏王朝初期最大の農民反乱の指導者。咸鏡道吉州の大豪族で会寧府使などを歴任した。咸鏡道は、太祖李成桂の出身地でもあるが、李氏朝鮮の初期まではほとんどが女真の領地であった。世宗の時代に侵略して併合し、数度にわたる徙民政策を行い人口の増加と安定を図ろうとした。「咸鏡道」という名称もこの時から使われるようになった。咸鏡道は、その後も女真との国境に位置する為、南進する女真との国境紛争が絶えず、李氏朝鮮の重要防衛拠点でもあった。世宗の時代に豆満江と鴨緑江を防衛ラインにすることで北境が確定し、咸鏡道の道境もほぼ確定した。しかし、中央集権に組み込まれたため、地方豪族の排除、中央支配の強化、田税、軍役などの負担が増し、それに反対した咸鏡道の土豪、農民が李施愛により組織され、四ヵ月に及ぶ反乱が起こった。李施愛はまず中央派遣の役人を殺害し、咸鏡道出身者の地方官任命などを要求したが、鎮圧された。政府は、これに伴い、高麗末期から地方勢力の拠点となっていた全国の留郷所(のちに郷庁に改組)を一時廃止した。

【現代語訳】 多信山城。吉州の南三十一里(一二キロほど)に在り、またの名を江城(강성)とも言う。城内には十ヶ所の池がある。古くは軍倉があり、穀物の蓄えがたいへんたくさんあった。しかし、李施愛が挙兵に失敗すると、軍倉に火をかけて燃やして敗走した。また石城があった。今は荒廢して跡形もない。古くは吾布城と称した。

(一二)

【正文】 斜竹洞舊堡。在明川府西北三十里。通衢於長白山賊路。又與鏡城鬼門關隔溪。去彼境不過四五日程。藩胡在時。出沒梗化。故設堡備禦。今廢。

【和訓】 斜竹洞舊堡。明川府の西北三十里に在り。長白山の賊路に通衢す。又た鏡城の鬼門關と溪を隔つ。彼の境へ去るは四五日程に過ぎず。藩胡の在りし時、出沒して梗化たり。故に堡を設け備禦す。今は廢す。

【釈語】

- ・斜^カ斗洞舊堡(사마동구보)…咸鏡道地名。『中宗實錄』(中宗二十年二月二七日)に一例有り。「咸鏡道御史張季文復命啓曰。富寧青巖里民、訴于臣曰。田畚、往年盡爲漂沒。連境會寧地居人移入于豐山、甫乙下等堡。而爲空地。請割屬于本邑。且言。流亡人公債、督徵其族隣、爲憫。云云。且將軍坡堡軍人訴云。本堡不產草料。將移于三歧。三歧之絶遠。與此堡無異。請依舊遷移于梨德。且斜斗洞堡入番軍人訴云。本堡無可耕之地、臣等入歸、將何以爲食。仍以各邑不法事書啓、傳曰。季文所啓之言、言于該司、見犯各邑、則宜以例推。」(和訓…咸鏡道御史張季文復命して啓曰。「富寧青巖里の民、臣に訴へて曰く。『田畚往年盡く漂没と爲りて、境を連ぬる會寧の地に居する人、豐山、甫乙下等の堡に移入して空地と爲れり。本邑に割屬せられんことを請ふ』と。且言ふ。『流亡の人の公債を其の族隣に督徵するは、憫と爲す。云云』と。且軍を坡堡に將るの軍人、訴へて云ふ。『本堡は草料を産せず、將に三歧に移さんとす。三歧の絶遠なること、此の堡と異なる無し。請ふ舊に依り梨德に還移せん』と。且つ斜斗洞堡に入番の軍人、訴へて云ふ『本堡は耕す可き地無く、臣等の入歸すれば、將に何を以て食と爲さん』と。仍りて各邑不法の事を以て書して啓し、傳へて曰く。』季文啓す所の言、該司において、各邑犯さるれば、則ち宜しく例を以て推すべきことを言ふ。」)
- ・鬼門關…この世とあの世の間にある關所。転じて地獄の一丁目、もしくは、險惡な場所のたとえ。
- ・通衢…四通八達の場合。
- ・藩胡…元末から明初にかけて、多くの女真人が朝鮮境内に侵入し、牧畜、耕作を行いながら居住していた。酋長の中には朝鮮国王に臣下として貢納を行う者もあり、女真と朝鮮との間の垣根(藩籬)の役割を果たすことから、朝鮮官府では「藩胡」と呼ばれた。
- ・梗化…頑なに教化に服従しないこと。

【現代語訳】斜斗洞旧堡は明川府の西北三十里に在つて、長白山の賊路へと四通八達している。また、鏡城の鬼門関と溪を隔てている。そこへ行くにはたったの四五日程であるが、女真人がいた時には、出沒して頑に教化(王

朝の支配」に反抗していた。そのようなわけで、そこに堡を設けて防いだのである。現在は廃墟になっている。

（一四）

【正文】大良化。在鏡城府南一百八十五里海邊。有廢縣基。俗傳古有長川縣監。廢後有印藏于本府。壬辰倭亂見失云。

【和訓】大良化。鏡城府南一百八十五里の海邊に在り。廢縣の基有り。俗に傳ふ。古くは長川の縣監有り。廢せし後、印有りて本府に藏す。壬辰倭亂に失なはると云ふ。

【釈語】

・大良化…咸鏡道鏡城近くにある地方港。

・壬辰倭亂…宣祖二五年（文祿元年、一五九二年）、豊臣秀吉が明の征服を目的に朝鮮に出兵した侵略戦争。日本では文祿の役と呼ぶ。日本軍は約一六万の軍を釜山に上陸させ、開戦から半月あまりで首都漢陽を陥落させ、その翌月には平壤まで至り、明の国境まで進出した。一四代王宣祖は義州にまで逃亡を余儀なくされたが、義兵の抵抗や水軍の攻撃、明の介入などによって戦況は次第に膠着し、停戦となる。

【現代語訳】大良化。鏡城府の南一百八十五里の海辺に在る。廃墟になった県の建物の土台が有る。俗に伝えるところによると、古くは長川縣監という官職があつて、廢された後に、鏡城府に印が藏されていたが壬辰倭亂の際に失われた云々と言う。

（一五）

【正文】富居廢縣。在富寧府東六十里。石城盡頽。只存基址。縣西山。有古塚萬餘皆石槨。未知何時物也。

【和訓】富居廢縣。富寧府の東六十里に在り。石城、盡く頽る。只た基址を存すのみ。縣の西山に古塚萬餘有りて、皆石槨なり。未だ何れの時の物かを知らざるなり。

【釈語】

・富居廢縣…三国時代には高句麗の領有下にあり、後に渤海国の領有となる。渤海の滅亡後は女真族の領域となり、金国及び元朝の統治下に入るが、明朝初期、文書によって高麗に割譲され、高麗はここに鏡城郡を設置した。高麗末には石幕城と称された。世宗十三年（一四三一年）には石幕城に寧北鎮が設置され、節制使が鏡城郡を兼ねた。朝鮮王朝時代には、富居県が置かれたが、世宗三十一年（一四四九年）に富居県を廃して民戸を石幕城に移し、富寧と改称した。

・萬餘 たいへん多いこと。

・石槨 墓室内部の棺を保護するための石で作った外箱。

【現代語訳】富居廢縣。富寧府東六十里にある。石づくりの城壁はことごとく頽れており、古い土台を残すのみになっている。県の西山に古い土を盛った墓が数多くあり、すべて石槨を有する。いつの時代につくられたものなのかはわからない。

(二六)

【正文】行城在會寧府西北三里。自府西兎山烟臺始起。依豆滿江岸。回迂延袤。至慶源府訓戎鎮而止。在府境者。長一萬一千七百二十尺高十五尺。世宗辛酉春。因節度使金宗瑞疏。體察使皇甫仁、黜陟使鄭甲孫。自辛未始築。中宗己巳。新設甫乙下鎮。退築長城。凡三萬一千六百尺。今廢。

【和訓】行城は會寧府の西北三里に在り。府の西、兎山烟臺より始起り、豆滿江岸に依り、延袤を回迂し、慶源府訓戎鎮に至りて止む。府の境に在る者は、長一萬一千七百二十尺、高十五尺なり。世宗辛酉春、節度使金宗瑞の疏に因り、體察使皇甫仁、黜陟使鄭甲孫が辛未より築を始め、中宗の己巳、新たに甫乙下鎮を設け、退きて長城を築く。凡そ三萬一千六百尺なり。今は廢す。

【釈語】

・行城(행성) … 外地に出征した軍師が留まる鎮營一帯に築いた城(石垣)として、もともとは「行宮城」を指したが、ここでは辺境の川(豆満江)沿いに直線的に積んだ石垣のことを言う。特に、世宗二十四年に築かれた訓戎から甫乙下まで豆満江辺に沿って積まれた長い行城(石垣)を指す。

・延袤…「延」は横で東西の、「袤」は縦で南北の長さの意。土地の広さ、大きさのこと。

・訓戎鎮(훈용진) … 鎮名。『制勝方略』に北方防御の拠点として「訓戎鎮属慶源。南距慶源二十五里。西距黄柘坡二十二里。城周回五千五百八十八尺。」のようにある。(二二)の正文および釈語も参照のこと。

・世宗辛酉…世宗二十一年。西暦一四四一年。

・金宗瑞(김종서) … 一三八三〜一四五三(端宗二)年。李氏朝鮮前期の武臣、学者、政治家。字は国卿。号は節斎。本貫は順天。世宗が最も寵愛した家臣として知られる。一三八二年都摠制の金鍾の息子として生まれる。一四〇五年官職に就く。世宗が即位した一四一九年に司諫院右正言(正六品)になり、以後、持平(正五品)、執義(従三品)、右副代言(正三品)を歴任する。一四三三年、咸吉道都觀察使(従二品)となる。女眞の侵入に対し、北辺に六鎮を開拓、設置することに貢献し、豆満江まで国土を拡大し、国境と定めた。一四四六年議政府右贊成(正二品)になる。一四五一年に左贊成知春秋館事(従一品)になり鄭麟趾らと『高麗史』改撰の総指揮をとり、『高麗史節要』を編纂刊行する等、智勇を兼備し大虎と呼ばれた。一四五一年一〇月右議政になる。一四五二年『世宗実録』を監修。左議政(正一品)となり文宗の遺命を受け幼い端宗を輔佐するが、王権の強化を目指す首陽大君(後の世祖)と対立し、一四五三年癸酉靖難により、息子共々惨殺され、大逆謀反罪で梟首された。死後約三〇〇年を経た肅宗の時代に復権する。著書に『制勝方略』がある。諡号は忠翼。

・體察使(체찰사) … 地方に軍乱がある際、王に代わってその地方に赴き一般の軍務をあまねく総轄する臨時的な官職である。従二品相当。

・皇甫仁(황보인) …一三八七〜一四五三(端宗二)年。朝鮮王朝前期の文臣。本貫は永川。字は四兼、春卿、芝峰と号する。太宗の時に文科に合格し、世宗の時に北道体察使(従二品)として金宗瑞とともに六鎮を開拓し、右議政(正一品)となる。その後一四五二年、文宗の時に領議政(正一品)となり、端宗をよく補佐するようにという文宗の遺言を守って幼い端宗を保護したが、一四五三年、首陽大君に金宗瑞とともに惨殺される。

・黜陟使(출척사) …觀察黜陟使。觀察使(朝鮮時代に各道の行政を担当した従二品の長官職)の初期の名称。
・鄭甲孫(정갑손) …一三九六(太祖五)〜一四五一(文宗二)年。朝鮮前期の文臣。一四一七(太宗一七)年、式文科に同進士合格した後、副正字(従九品)、監察(正六品)、兵曹佐郎(正六品)、貢献(正五品)、持平(正五品)などをあまねく経て知承文院事になった。一四三五年(世宗一七)に直立した性格を認められ左承旨(正三品堂上官)に拔擢され、一四三八年(世宗二〇)全羅道都觀察使(従二品)となる。一四四一年(世宗二三)大司憲に吏道を正し、さらに世宗の信任を受けた。その後、京畿道と咸鏡道の觀察使などを歴任した後、右參贊(正二品)を経て一四五〇(文宗即位年)左參贊(従一品)となり、判吏曹事を兼ねた。清廉であるとして広く知られ、中宗の時にとき清白吏と讃えられた。諡号は貞節である。

・中宗己巳…中宗四年、一五〇九年。

・甫乙下鎮(보을하진성) …会寧から二五里の距離にあり、北方防禦の要点として『制勝方略』に記載がある。

【現代語訳】行城は會寧府の西北三里にある。会寧府の西、兎山烟台より始まり、延表を回迂する。慶源府訓戎鎮に至り終わる。会寧府の境界に、長さ一二二〇尺、高さ十五尺の行城がある。世宗辛酉(世宗二一年、西暦一四四一年)春、節度使金宗瑞の上疏によって、體察使皇甫仁、黜陟使鄭甲孫が辛未(文宗一年、一四五一年)より築城を始めた。中宗己巳(中宗四年、一五〇九年)、甫乙下鎮を新設し、これまでの工事をやめて長城を築いた。凡そ三二六〇〇尺であるが、今は廢墟になっている。

【解説】北朝鮮会寧市に「甫乙下鎮城跡」をはじめとする朝鮮王朝時代の要塞遺跡が数多くみられるという。

その多くは、女真族、漢人などの外敵が多く出没する要害地とされる場所に建設され、その沿革は金端宗の著した『制勝方略』の内容を参考にしたと思われる。

(二七)

【正文】五國城。在會寧府西二十里。山麓豆江上、有古城遺址。俗稱游端。耕者往往得宋錢。今置甫羅僉使。按清一統志云。五國頭城。在寧古塔城東北。大金國志。天會八年。宋二帝自韓州如五國城。城在金國所都之東北千里。舊傳宋徽宗葬於此。又按扈從錄。自寧古塔東行六百里曰羌突里噶尚。松花、黑龍二江合流於此。有大土城。或云是五國城。蓋會寧金之上京也。五國城。在於金國所都之東北。則似是宋二帝幽囚之處也。

【和訓】五國城。會寧府の西二十里に在り。山麓の豆江上に古城の遺址有り。俗、游端と稱す。耕者は往往にして宋錢を得る。今、甫羅僉使を置く。按じるに清一統志に云ふ。五國頭城は寧古塔城の東北に在り。大金國志の天會八年に、宋の二帝韓州自り五國城に如く。城は金國の都する所の東北千里に在り。舊く宋徽宗を此に葬ると傳ふ。又た扈從錄を按ずるに、寧古塔より東に行くこと六百里を羌突里噶尚と曰ふ。松花、黑龍の二江此に合流す。大土城有り。或ひは云ふ是れ五國城なりと。蓋し會寧の金の上京なり。五國城は金國の都の東北に在れば、則ち是れ宋二帝の幽囚さる處に似る。

【釈語】

・五國城(오국성) .. 遼の五國部節度使の駐した地。宋の徽宗が崩じた所。ここより東に五国があつた。曰く、博和哩(滿洲語で豌豆の意)、博諾(滿洲語で雹の意)、鄂羅木(モンゴル語で渡口の意)、伊埒図(滿洲語で明顯の意)、伊勒希(滿洲語で副の意、である。遼の聖宗の時に内附した。その位置については五説ある。(一)『嘯亭雜錄』によると「伯都訥城」とあり、今の吉林省扶余県。(二)『扈從東巡日錄』によると、「自寧古塔東行六百里曰羌突里葛尚、(一作章圖哩噶善) 松花黑龍二江于此合流、有大土城、或云五國城」のようであり、松花江と黑龍江の合流する所であり、吉林省同江県の北。(三) 朝鮮では雲頭山城を五國城とする。

咸鏡北道會寧の西、現在の中国吉林省延吉の地である。城外に皇帝陵があり、宋徽宗を葬むった処として伝える。(四)『大清一統志』『柳邊記略』によると、寧古塔の近辺、現在の吉林省寧安県附近。(五)『盛京通志』『滿洲源流考』『寧古塔紀略』によると三姓の地方に五国城があるとされる。現在の吉林省依蘭県の治である(『中国古今地名大詞典』(上海辞書出版社)および『大漢和辞典』(大修館書店)より抜粋)。なお、『朝鮮世表全圖』(文化三年(一八〇六)田仲宣校、長田愚侯補、大阪・森田太助他出版社)によると、「五國城」という地名が白頭山麓、鴨緑江上流の朝鮮半島側に見えるが、これは上の(一)～(五)のいずれにも当たらない。

・會寧府(회령부) … (一) 金により設置さる。吉林省阿城県の南の白城。渤海国の時代には海古勒地という。金、完顔氏発祥の地であり、金太祖が都を建てて上京とした。(二) 朝鮮、咸鏡北道會寧郡の地名。

・宋錢…宋の铸貨は銅錢、鉄錢の二種あるが、宋錢とは普通銅錢をさす。宋では銅山の発掘と铸錢とはいずれも国家の経営に属し、その造幣局を铸錢監、铸錢院とよんだ。宋初全国铸錢高は一年七万貫くらいであった。貫とは銅錢一千個の単位で緡^{びん}または千とも称した。宋代では経済一般の発達により次第に増铸され、ついに神宗朝では六百万貫にも及んだ。これらは一個一文(一錢)の価値を持ち、小平錢(または小錢と称した。財政窮迫すると当一〇錢(一〇文錢)、当五錢(五文錢)などを铸造したが、主として流通したのは当二錢と小平錢であった。宋錢は、金、西夏、南洋方面、遠くはペルシア、アフリカ方面にも輸出され、ほとんど全アジア地域に流布し、当時の経済界に大きな役割を果たした。しかし、北宋初年、辺疆である四川地区では敵対関係にある遼、西夏への銅の流出を防止するために、銅錢の所有、使用一切が禁じられて代わりに鉄錢を铸造して強制的に流通させていた。李氏朝鮮時代の北塞における貨幣の流通については、『北塞記畧』中の「孔州風土記」に「禁用錢。以布縣爲貨。路無不鋪店。行旅齋糧而炊。不用盤纏。自南而北自北而南者。皆受公文於官。以譏非常。」とあるように、布貨が主であった。

・僉使(보라첨사) … 僉使は各鎮營に属する武官の職名であり、僉節制使(正三品)の略称である。

・清一統志…『大清一統志』。清代の全境域および朝貢諸国の地誌を記した書物。一七三二年（乾隆九）の三五六卷本、五一年（乾隆二九）の四二四卷本、一八二〇年（嘉慶二五）の五六〇卷本の三種があり、みな時の皇帝の勅命によつて編纂されたもの。中国の地理書の特徴として歴史地理的な記述に重点がおかれ、行政区画の沿革を主とし、古蹟や人物に多くの部分が当てられている。

・宋二帝…『大清一統志』卷四六に「大金國志天 八年宋二帝自韓州如五國城」との記述がある。

・宋徽宗…一〇八二（元豐五）～一一三五（紹興五）。北宋第八代皇帝。諱は佖。神宗の第一一子。兄の哲宗が没して子になかったので、一一〇〇年（元符三）即位。向太后摂政の間は新旧両方を折衷した政治を行つたが、親政すると新法を採用、蔡京を採用、そのすすめによつて帝王らしい贅沢な生活を送つた。宮殿、庭園を造つたり、道教を尊崇して多くの道觀を建てたり、また画院を盛大にして院体画の隆盛をまねき、全国から文化財を集めて保護を加えるなどによつて、文化史上宣和時代を現出した。みずからも詩文、書画をよくし、書は瘦金体、画は院体をもつて専門家に伍し、歴代皇帝中随一の文化人と言われる。政治的才能にはとぼしく、一一二五（宣和七）年、金軍の攻撃をうけると欽宗に譲位、教主道君皇帝といわれたが、のちまもなく国都開封は陥落、欽宗とともに捕虜となり、宋室は中絶した。北満の五国城の配所で没す。

・扈從錄…『扈從東巡日錄』二卷附録一卷、一六八二（康熙二一）年刊。清高士奇（一六四五～一七〇四）撰。

・羌突里噶尙…「噶尙」は滿洲語で「村」の意。『扈從東巡日錄』の原文は次の通りで正文とほぼ一致する。「自寧古塔東行六百里曰羌突里噶尙。松花黑龍二江於此合流、有大土城。或云五國城、或云朝鮮北境。近寧古者有安置宋徽欽、故城在山頂南燼紀聞言二帝初遷安肅軍、又遷雲州、又遷西沔州、又遷五國城。其地去燕京三千八百餘里西上黃龍府二千一百里此城乃漢將李陵戰敗之地、今以他書考之、地里遠近不甚相合。姑備載於此以俟後之考者。」

・松花江…松花江。中国東北部の大河。長白山に発源し、嫩江、牡丹江を合わせ、臨江に至つて黒龍江に合流する。魏書には速末水とみえ、唐代には栗末水と呼ばれた。遼では鴨子河、混同江、金では混同江あるいは黒水と

呼ばれた。遼では松阿哩江^{スンガリ}、金に宋瓦江、明に松花江と呼ばれた。満洲語では松花江は「松阿里烏喇^{スンガリウラ} (Sungari ula)」すなわち「天の川」と呼ばれており、この地に入ったロシア人もスンガリ (Cyraa) と呼んだ。第二次世界大戦前の日本、殊に満洲国時代の日本人の間でもスンガリ川の名で知られている。愛琿条約^{アイグン}ではこの河の航行権が清からロシアに与えられ、のち両国間の問題となった。(『東洋史辞典』三七八頁より抜粋)。
・黒龍・黒龍江。中国東北部とソ連領シベリアとを界とする大河。外蒙古のアルタン、オノン二河を源流とし、松花江、烏蘇里河を入れて間宮海峡に注ぐ。南北朝のころから中国人の記録に黒水として現れるが、これは満洲の土名サハリヤン・ウラ (Sahalien-ula) の意訳である。黒龍江はその雅称。もっぱら元、明以降の呼称となった。ツングース族はアムール河 (Amur R.) と呼ぶ。この河が歴史上重要になったのは一七世紀以後で、ロシアの極東進出の根幹を成す交通路となり、愛琿条約でこの革の通交圏がロシアに与えられた(『東洋史辞典』二四九頁より抜粋)。

・金国・女真族により建てられた王朝名。一二世紀初め生女真の完顔部から阿骨打が出て中国東北部から遼の勢力を一掃し、一一一五年に遼から自立して金を建国した。金は、遼、北宋を滅ぼし中国の北半分を支配した。金の時代に、漢字や契丹文字の影響で女真文字が作られたが、元、明の間に忘れ去られた。やがて、金はモンゴル族の侵入に遭い、故地満洲を失い、燕京に留まることができずに一二一四年開封に遷り河南を転々としたのちモンゴルと宋の連合軍のために滅ぼされる。その際、故地を既にモンゴル軍に奪われて中原に取り残された大勢の女真が、モンゴル人と漢人双方からの攻撃を受けて死滅した。(『東洋史辞典』一七五～一七六頁)

【現代語訳】五国城。會寧府の西二十里にある。山麓の豆満江のほとりに古城の遺跡がある。人々は「游端」と称する。ここを耕やす者はしばしば宋銭を掘り当てる。今は甫羅僉使が設置されている。『清一統志』によれば、五国頭城は寧古塔城の東北にあるという。『大金国志』によれば、天會八年(一一三〇年、建炎四年)に宋の二帝(徽宗と欽宗)が韓州から五国城に行っている。城は金国が都とする所の東北千里の地にある。かつて、宋の徽宗をここに葬ったと伝えられている。また『扈從錄』によると、寧古塔より東に六百里行った場

所を羌突里噶尙と言う。松花江、黒龍江の二江がここで合流する。大きな土城があり。或いはこれが五国城であらう。思うに会寧は金の都であつた。五国城は金国が都とする所の東北にあるので、宋二帝が幽囚されたところと考えられるのである。

(一八)

【正文】皇帝塚。在行營西北二十五里花豐山山谷中。有大墳如丘陵。傍有小塚百餘。用雜石作壙形。謂之侍臣塚。每天陰雨濕之時。有歌哭聲。

【和訓】皇帝塚。行營の西北二十五里、花豐山山谷中に在り。大墳丘陵の如き有り。傍に小塚百餘有り。雜石を用ひて壙形に作る。之を侍臣塚と謂ふ。天の陰^{くも}り雨の濕る時毎に歌ひ哭く聲有り。

【釈語】

・皇帝塚(황제총) … 会寧府にあるとされる宋皇帝欽宗の墓。金国の捕虜となり五国城に配流されそこで亡くなつたとされる。

・壙…墓穴。

【現代語訳】皇帝塚。行營の西北二十五里、花豐山山谷中にある。丘陵のような巨大な墓地がある。傍に小さい墓が百あまりある。雜石を用いて墓穴の形を作る。これを侍臣塚という。空が曇つて雨で湿る時ごとに、歌つたり泣いたりする声が聞こえる。

(一九)

【正文】童巾城。在鍾城府北二十七里。石築周六百一十一尺高三尺。絶壁一千一百十餘尺。中有大池。四面粧以鍊石。池底鋪磚。池畔有石。平博如砥。諺傳有童巾者。題其石曰。泰定五年。防寇七年。云云。故名。

【和訓】童巾城。鍾城府の北二十七里に在り。石もて築き周六百一十一尺高三尺。絶壁一千一百十餘尺なり。中

に大池有り。四面は鍊石を以て粧^{よそお}う。池底には磚を鋪す。池畔に石有り。平にして博きこと砥の如し。諺に童巾者有りと傳ふ。其の石に題して曰ふ。泰定五年。寇を防ぐこと七年。云云。故に名づく。

【釈語】

・童巾城（동긴성）…『新增東國輿地勝覽』（卷五十 鍾城）第三六頁に次のような記載がある。「童巾城。在府（訳注…鍾城都護府）北二十七里。石築。周六百三十二尺。高三尺。絶壁一千一百二十一尺。中有大池。四面粧以鍊石。池底鋪以博石。池畔又有石平博如砥。諺傳。有童巾者。題其石曰。泰定五年防寇七年。云云。故稱童巾城。」（和訓…童巾城。府北二十七里に在り。石築。周り六百三十二尺、高さ三尺。絶壁一千一百二十一尺。中に大池有り。四面は鍊石を以て粧う。池底には博石を以て鋪く。池畔には又た石有りて平にして博きこと砥の如し。諺に傳ふ。童巾者有りと。其の石に題して曰ふ。泰定五年、寇を防ぐこと七年。云云。故に童巾城と稱す。）

・童巾…頭巾。「童巾者」とは、頭巾を冠った者の意か。

・鍾城府…高句麗以後は朝鮮王朝と女眞の係争地であった。一名を愁州とも言う。朝鮮王朝は、世宗一六年（一四三五年）に寧北鎮に鍾城郡を置いて節制使に知郡事を兼任させた。一四四〇年には郡治が童巾山南麓に移転し、寧北鎮には節制使の行營が残された。のちに鍾城郡は鍾城都護府に昇格した（『新增東國輿地勝覽』（卷之五十 鍾城）第三六頁を参照）。

・泰定五年…「泰定」は元代に泰定帝の治世で用いられた元号。一三二八年。

【現代語訳】童巾城。鍾城府の北二十七里にある。石築で周囲六百十一尺、高さ三尺。絶壁の高さ一千一百十余尺である。中に大池が有る。四面は鍊石を以て飾られている。池の底には磚^{れんが}が敷き詰められている。池の畔^{ほとり}に石があり、平らで博いこと、まるで砥石のようである。民間の言い伝えでは童巾者がいるという。其の石に次のように記されている。元の泰定五年（一三二八年）。寇を防ぐこと七年云々。そこでこう名づけた。

【解説】『世宗実録 地理誌』によると、鍾城都護府は童巾という山があることから鍾城と名付けられた。一説

に、豆満江辺の女真人や漢人は鍾をドンゴン（童巾）と言う。世宗の時代までは、女真人がその山をドンゴン山と呼び、それが六鎮開拓後は鐘城という地名になったそうである。山が伏せた鍾のような形なので童巾山と名付けられたとも言う。

(二〇)

【正文】 ㄲ乙亏古城。在茂山府北四里。周千餘尺。三面絶壁。一面掘土。藥泉、陳北邊地圖疏云。自茂山北行一百二十餘里。歷丞相坡、吾達、竹頓、毛老、東良洞、老土部落等地。至江邊。始有ㄲ乙亏施培地。ㄲ乙亏者。胡酋之名。而施培者。胡語堡城也。至今有城基古跡。其地開野數十里。而北枕大江。南帶長川。環以四山。平如鏡面。土地沃厚。又非他處之可比者。是也。

【和訓】 ㄲ乙亏古城。茂山府の北四里に在り。周、千餘尺。三面絶壁なり。一面は掘土なり。藥泉、陳北邊地圖疏に云ふ。「茂山より北行すること一百二十餘里。丞相坡、吾達、竹頓、毛老、東良洞、老土部落等地を歴して江邊に至る。始めてㄲ乙亏施培地有り。ㄲ乙亏は胡酋の名なり。而うして施培は胡語の堡城なり。今に至るも城基の古跡有り。其の地野を開くこと數十里にして北は大江に枕す。南は長川を帶び、環するに四山を以てす。平らかなること鏡面の如し。土地は沃厚にして、又た他處の比ぶる可きに非ず」は是れなり。

【釈語】

・ㄲ乙亏 (마을) …人名。女真族酋長。「陳北邊三事仍進地圖疏」では「ㄲ乙于」、「宣祖實錄」では「ㄲ乙外」も。

・藥泉…『藥泉集』。朝鮮後期の文臣南九萬（一六二九—一七一）の詩文集。農政、海防、及び貢賦に関する記述が多い。中でも「陳北邊地圖疏」つまり「陳北邊三事仍進地圖疏」（一六七三）は、特に北方警備に関心を示した。新羅が三国を統一して以後、高麗の全盛期に至るまで、朝鮮半島の東北まで国力が及ばなかったため、会寧、鏡城、茂山及び梁永堡、豊山堡等の地名を列挙して、北方異民族への対策を具体的に説明した。

【現代語訳】「乙乙^{マウル}古^ウ城」。茂山府の北四里にある。周囲は千餘尺。三面絶壁で一面は土を掘った空壕である。『藥泉集』収「陳北邊地圖疏」に次のように言う。「茂山より北行すること一百二十余里。丞相坡、吾達、竹頓、毛老、東良洞、老土部落等の地を経て豆満江辺に至る。始めに乙乙古^{マウル}施培地がある。乙乙古^{マウル}とは女真人酋長の名である。施培とは女真語で堡城という意味である。今でもまだ城の土台の古跡が残っている。その地は野を数千里開拓したもので北は豆満江に臨む。南には長川があり、周囲は山に囲まれている。土地が平なことまるで鏡のようである。土地は肥沃であり、まさに他に比べるべき場所がないほどである。」と述べているのが、これである。

【解説】『宣祖實錄』によると、「乙乙古^{マウル}城」とは宣祖三三年（一六〇〇年）の女真討伐の際に焼き討ちに遭い破壊された城塞跡である。いわゆる壬辰倭乱後、北方の警備が手薄になったのと同時期、女真族の勢力が強くなり、北辺が度々侵されることに朝廷は頭を悩ませていた。『宣祖實錄』三二年（一五九九年三月二八日）によると、会寧の藩胡明看老などが国境を侵犯したので、北兵使李鎰は姜億弼など三〇余人の兵を送って誘い込もうと図ったが、襲撃を受けて全滅するなどの事件が起きた（原文…「咸鏡監司宋言慎馳啓曰。會寧藩胡明看老等來犯我境、北兵使李鎰、送姜億弼等三十餘人誘之、爲其所襲、盡殲事。」）。そのため、朝廷内では次のように、女真に強く警告するべきだという意見が出される。

「（先の女真の襲撃により殺害された）姜億弼、姜億水は有名な土兵にして、前より胡人（女真）が順ならざる有れば則ち例として此の輩を送り之を誘ふ。故に李鎰は老土に因りて開釁^{かいきん}（争いをしかける）し、之をして入送し開誘せんとするに、渠等^{かれら}先ず疑慮を生じ、敢へて廝殺^{そころ}を行ふ。此れ乃ち犬羊の常態なり。若し恃むところ有らば、則ち但だ竊發^{せつはつ}するのみならず、必ず舉衆して来る。此の若くして已まざれば、則ち邊將罪を得ざるもの無くして、邊民の安插^{あんさつ}を得ず、終に息肩の日の無からん。必ず機を相て^み、一二部落を勦滅するを須^まち、之をして慥服^{たつぷく}せしむは可ならん。（原文…姜億弼、姜億水者、有名土兵也。自前胡人不順、則例送此輩誘之、故李鎰因老土開釁、使之入送開誘、而渠等先生疑慮、敢行廝殺。此乃犬羊常態。若有所恃、則不但竊

發、必舉衆而來矣。若此不已、則邊將無不得罪、邊民不得安插、終無息肩之日矣。必須相機、勦滅一二部落、使之懾服可也。〔宣祖實錄〕三三年（一五九九年）四月二一日。〕この計画はすぐに実行に移され、宣祖三三年（一六〇〇年）四月一四日深夜から一五日未明にかけて、丁乙外部落を中心にいわゆる「北伐」が行われた。〔胡家土を塗ること甚だ固くして、屋上の苫蓋焼くと雖も、四壁則ち例に火付かず、故に軍卒中に斧持つ者をして、打破し再び焼かしむ。一架として遺存する無し。張主部落より丁乙外部落に至るまで、無慮千餘家。一時焚蕩し、烟焰天に漲り、土氣自づと倍す。賊敢へて近づかず。壯弱男女、散りて山上に登り望見し、號哭するのみ。埋窖するの穀物に至りては、亦た皆撥開し焼火す。已に種うるの田は、盡く踏損を行ふ。丁乙外の城寨も亦た爲に焚燒す。此の賊強盛にして、張主部落より丁乙外部落に至るまで四十餘里は、左右に高山絶壁有るも、其の中は寛敞にして土地膏沃なり、中に大川有りて、諸部水を夾みて居す、房屋櫛比し、家家富饒なり、水下の諸胡の比ぶるところに非ず。而るに俄頃の間、地を掃つて一空、見る所壯快なり。〕（原文…胡家塗土甚固、屋上苫蓋雖燒、四壁則例不付火、故令軍卒中持斧者、打破再燒、無一架遺存。自張主部落、至丁乙外部落、無慮千餘家、一時焚蕩、烟焰漲天、土氣自倍、賊不敢近、壯弱男女、散登山上望見、號哭而已。至於埋窖穀物、亦皆撥開燒火、已種之田、盡行踏損、丁乙外城寨、亦爲焚燒。此賊強盛、自張主部落、至丁乙外部落、四十餘里、左右有高山絶壁、其中寛敞、土地膏沃、中有大川、諸部夾水而居、房屋櫛比、家家富饒、非水下諸胡之比、而俄頃之間、掃地一空、所見壯快。〕『宣祖實錄』三三年（一六〇〇年）五月八日。

(一一)

【正文】慶源訓戎鎮。豆滿江上水碑銘曰。粵自關土五周甲寅。枝合元派。水道底定。始於甲寅。防於甲寅。建標惟三。萬世爲證。慶源府使李袖書。平山府使洪錫龜篆。康熙十三年甲寅三月日立。

【和訓】慶源訓戎鎮。豆滿江上の水碑銘に曰ふ。「粵に關土より五周の甲寅。枝は元の脈を合し、水道は底定す。甲寅より始め、甲寅に防ぐ。標を建つること惟れ三。萬世に證と爲す。慶源府使李袖書。平山府使洪錫龜篆す。

康熙十三年甲寅三月日立。」

【釈語】

・慶源(경원) …現在の北朝鮮咸興北道に属する地域。古くは孔州と称す。高句麗、渤海を経て女真族の居住地となったが、高麗から朝鮮王朝にかけて女真との間に争奪が繰り返ひろげられ、一四世紀に一旦は朝鮮王朝の支配下に入る。その経緯について『新增東國輿地勝覧』(卷五十 慶源) 第一九〇頁は次のように記す。「慶源都護府【建置沿革】古稱孔州。一曰匡州。後人掘地得銅印。其文曰。匡州防禦之印。久爲女真所據。高麗尹瓘。逐女真設砦。爲公險鎮内防禦所。本朝 太祖七年。因古址築石城。以其地有德陵、安陵。且肇基之地。改今名。陞爲府。割鏡城府龍城以北屬之。 太宗九年。移治于蘇多老古營。設木柵以居。十年。因女真入寇。徙民戸併于鏡城郡。遂虛其地。十七年。割鏡城豆籠耳峴進北之地。復置邑於富家站爲都護府。即古富居懷綏驛之地。世宗十年。又移府治于會叱家之地。徙南界民戸以實之。置土官。」(和訓…古は孔州と稱す。一に匡州と曰ふ。後人、地を掘りて銅印を得る。其の文に「匡州防禦之印」と曰ふ。久しく女真の據る所となる。高麗の尹瓘、女真を逐ひ砦を設け、公險鎮内防禦所と爲す。本朝 太祖七年、古址〔訳注…公險鎮内防禦所〕に因みて石城を築く。其の地に德陵、安陵有り、且つ肇基の地たるを以て、今名〔訳注…慶源〕に改し、陞せて府と爲す。鏡城府の龍城以北を割き之に屬せしむ。 太宗九年。蘇多老古營に移して治む。木柵を設け以て居す。(太宗) 十年。女真の入寇するに因り、民戸を徙して鏡城郡に併せ、遂に其地を虚す。(太宗) 十七年、鏡城の豆籠耳峴進の北の地を割き、復び邑を富家站到置き都護府と爲す。即ち古富居懷綏驛の地なり。世宗十年。又た府を會叱家の地に移して治む。南界の民戸を徙して以て之を實たし、土官を置く。)

・訓戎鎮(훈용진) …『新增東國輿地勝覧卷之五十(慶源)』第二二頁に次のようにある。「訓戎鎮。在府北二十八里。石城。周三千二百四十二尺。高八尺。内有井。有兵馬僉節制使營。」(和訓…訓戎鎮。府〔訳注…慶源府〕北二十八里。石城。周三千二百四十二尺。高八尺。内に井有り。兵馬僉節制使營有り。) 世宗は金宗瑞を咸古道〔後の咸鏡道〕都節制使に挙げて北方への領土拡大を図った。金宗瑞は會寧、慶源、慶興、鍾

城、穩城、富寧〔以上咸鏡北道〕の六鎮を設置し、甫乙下より訓戎鎮に至るまで長城を築き、これらの鎮城を連接し北方の防備としたことによつて、世宗の北方開拓はしばらくの間功を奏し、豆滿江以南の地を領土として軍事的に管轄することに成功した。しかし、豆滿江上流地域に歩を進めることはできなかった。

・自闢土五周甲寅…「闢土」とは土地を拓くことで、ここでは太祖李成桂が高麗の恭讓王を廢して、自ら高麗王に即位し、明から権知朝鮮国事に封ぜられた時（一三九三）を指すのではと考えられる。そこから五回目

の甲寅なので、一六七四年を指すか。

・底定…平定、安定の意。

【現代語訳】慶源訓戎鎮。豆滿江上に建てた水碑銘に次のように言う。「ここに闢土^{びやくど}より五周目の甲寅（一六七四年）。分岐した流れは元の流れとして合流し、江筋は安定している。甲寅に始め、甲寅に防ぐ。三基の標を建て、万世に証とする。慶源府使李袖書。平山府使洪錫龜篆す。康熙十三年甲寅（一六七四年）三月日に立てる。

【解説】豆滿江上に立てられた水碑というものについて、『新增東國輿地勝覽』（中宗二五、一五三〇年）には關係する記載はみられなかった。『高宗實錄』高宗一四年（一八七七年）に、次のような記述がある。「慶源府古珥島。仁祖丙子。江水横流。民田變爲別嶼。顯宗甲寅。築隄立石。定界耕食。其後防缺無常。仍爲荒廢。年來水尋古道、派斷陸連。民欲復墾、今又齊籲。詳察形便。溯考事蹟。則我疆彼界、江限分明。邑誌、碑文、帳付眞的。以此膏沃之地、棄作雉兔之場、實爲可惜。從民願許耕、恐好、令廟堂稟處。」（和訓…慶源府古珥島。仁祖の丙子（一六三六年）、江水横流す。民田は變じて別嶼と爲れり。顯宗甲寅、石を立て隄を築く。界を定め耕して食ふ。其の後缺を防ぐこと常め無し。仍つて爲に荒廢す。年來水の古道を尋ぬ。派斷たれ陸連なる。民復た墾やさんと欲す。今又た齊しく籲ぶ。形便を詳察し、事蹟を溯考すれば、則ち我が疆と彼の界、江を限として分明なり。邑誌、碑文、帳付は眞なり。此の膏沃の地を以て、棄作し雉兔の場とするは、實に惜しむべしと爲す。民の願に従ひて耕を許すは、恐らく好し。廟堂をして稟處せしむ。）

古珥島は咸鏡北道慶源郡にある島あるいは中州の名称か。対岸は中國琿春である。当時の度重なる水害によ

り、河川の形がかわるので中州に定界碑を置くことで境界線を固定しようとしたものと考えられる。

(二二)

【正文】南京。在鍾城府江北近地。自潼關鎮。渡豆滿江。經甫青浦。渡舍春川。有古城。號南京。其西北。又有山城。地名未可考。按元志曰開元府西南曰寧遠縣。又西南曰南京。又南曰哈蘭府。哈蘭。今咸興也。開元。古挹婁勿吉也。開元三萬。亦扶餘古國。而今屬寧古塔之境。扶餘。檀君之裔。而挹婁勿吉。皆其部落。則其地之係朝鮮無疑矣。蓋高麗之界。極於先春嶺。而南京巨陽。皆在境內。

【和訓】南京。鍾城府の江北に近き地に在り。潼關鎮自り豆滿江を渡り、甫青浦を経て舍春川を渡れば、古城有り。南京と號す。其の西北に又た山城有り。地名は未だ考ゆる可からず。元志を按ずるに曰く、開元府の西南を寧遠縣と曰ふと。又た西南を南京と曰ふ。又た南を哈蘭府と曰ふ。哈蘭。今の咸興なり。開元。古の挹婁勿吉なり。開元三萬。亦た扶餘の古國にして今は寧古塔の境に屬す。扶餘。檀君の裔にして挹婁勿吉。皆な其の部落なれば、則ち其の地は係れ朝鮮なること疑ひ無し。蓋し高麗の界、先春嶺に於て極まる。而して南京、巨陽、皆境内に在り。

【釈語】

・南京 (남경) …『新增東國輿地勝覽』(卷之五十 鍾城) 第三七頁に以下の記載有り。「自潼關堡渡豆滿江。經甫青浦。渡舍春川。有古城號南京。其西北又有山城。其地名未可考」(和訓…潼關堡より豆滿江を渡る。甫青浦を経て舍春川を渡る。古城有り南京と號す。其の西北に又た山城有り。其の地名は未だ考ふ可からず)。また、『元史』(志第十一、地理二)では「遼陽路。上。唐以前爲高句驪及渤海大氏所有。梁貞明中、阿保機以遼陽改城爲東平郡。後唐升爲南京。石晉改爲東京。」(和訓…遼陽路、上。唐以前は高句驪及び渤海大氏の有する所と爲す。梁貞明中、阿保機遼陽故城を以て東平郡と爲す。後唐、升して南京と爲す。石晉、改め東京と爲す)という条がある。正文中の南京とは、金の軍閥蒲鮮萬奴が豆滿江下流域に建てた地方政權

(国号については東真、大真等諸説あり)の都名であり、蒲鮮萬奴の故国金の五京に倣い設けたもので、『元史』でいう遼陽の南京とは異なると思われる。

・鍾城府…正文(一九)の釈語および解説を参照のこと。

・山城…『東國輿地勝覽卷之五十(吉城)』(第一四頁)に次のようにある。「山城。在縣南三十四里。石築。周四千四百五尺。高八尺。今半頽圯。」

・開元…中国、元代に現在の東北におかれた地方行政区。金末に大真国(東真国、東夏国とも)を建てた蒲鮮万奴が、現在の東寧県三岔口付近に築いた開元城に基づく名。『元史』(志第十一 地理二)にその名が見える。『新訂増補東洋史辞典』によれば、元は一二三五年以来開元、南京二万户を黄龍府(農安)におさめ、六七年(至元四年)遼東路総監府と改め、八六年(至元二年)今の開元に移し、同時に開元路と改称して明初に及んだ。

・哈蘭府(합란부)…「元置哈蘭府。其古治在今府南五里。○今按大明一統志。開元城在三萬衛西門外。元志。開元城西南曰寧遠縣。又西南曰南京。又南曰哈蘭府。又南曰雙城。直抵高麗王都。所謂哈蘭。即此雙城。即永興府三萬衛。即古挹婁勿吉之地(『東國輿地勝覽卷之四十八(咸興)』第一四頁)。(和訓…元の哈蘭府を置く。其の古治は今の府南五里に在り。○今、大明一統志を按ずるに、開元城は三萬衛西門外に在り。元志。開元城の西南を寧遠縣と曰ふ。又た西南を南京と曰ふ。又た南を哈蘭府と曰ふ。又た南を雙城と曰ふ。直ち高麗王都に抵る。所謂哈蘭は即ち此の雙城なり。即ち永興府の三萬衛。即ち古の挹婁勿吉の地なり)。」『元史』(志第十一、地理二)では「合蘭」と表記さる。

・挹婁…沿海州方面から黒龍江下流、あるいは松花江流域にわたって活躍した古代部族の名称。三世紀前半、扶余の支配下から独立して強盛となり、周囲の諸国と争った。ツングース族とも、アジア系種族とも言われる。勿吉…中国の南北朝時代に高句麗の北から満洲地域に居住したとされる狩猟民族であり、現在の松花江から長白山一帯に居住していたと思われる。肅慎、挹婁の未裔で、唐代における靺鞨の前身である。勿吉は勇敢

なことで知られ、周辺諸国を頻繁に略奪しており、四九四年には夫余を滅ぼしている。『魏書』、『北史』では「東夷で最強」と評されている。隋代以降からは「靺鞨」と表記され始め、「勿吉」と表記されなくなった。

・扶餘(부여) … 前二世紀から五世紀の終わりまで中国東北部に存続した貊人の国。夫余とも書く。その根拠地については、今日のハルビン東南阿城附近とも長春西北方の農安附近ともいわれるが、松花江中流域を占める平野を支配する大勢力となった。その建国は中国东北地区南部に進出した中国人から、政治的・文化的な強い影響を受けた結果と考えられる。一世紀初めから三世紀なかごろに最盛となり、南満洲の中国王朝の出先機関と親善を結びながら、扶餘にひきつづいて東満洲に國を立てた高句麗や、東部蒙古の鮮卑と対立した。しかし、三世紀後半よりは次第に両者の圧迫を受け、四九四年に勿吉に滅ぼされた。

・檀君(단군) … 朝鮮の始祖にして伝説上の神人。天神の孫として平壤に降臨して開国したと伝う。『三国遺事』に初見する伝説であり、高句麗の中頃に成立したものと推定される(『改訂増補東洋史事典』より抜粋)。

・巨陽(거양) … 『東國輿地勝覽卷之五十(慶源)』(二四頁)に次のようにある。「巨陽城。巨一作開。縣城北九十里山上。有古石城。名曰於羅孫站。其北三十里有虛乙孫站。其北六十里有留善站。其東北七十里有土城古基即巨陽城。内有兩石柱。古縣鍾處。高三尺。圓經四尺有奇。嘗有慶源人庾誠者。至其城碎其鍾。用九馬駄來。纔十分之一。從者三十餘人皆死。其遺鐵置草中。人不敢取之。世傳。城乃高麗尹瓘所築。西距先春嶺六十里許。」(和訓…巨陽城。巨は一に開に作る。縣城北九十里の上に古き石城有り。名を於羅孫站と曰ふ。其の北三十里に虛乙孫站有り。其の北六十里に留善站有り。其の東北七十里に土城の古基有り。即ち巨陽城なり。内に兩の石柱有り。古の鍾を縣くる處なり。高さ三尺。圓經の四尺にして奇有り。嘗て慶源の人に庾誠といふ者有り。其の城に至りて其の鍾を碎く。九馬を用ひて駄はこび來る。纔わずかに十分の一なり。從者三十餘人皆な死す。其の遣りし鐵は草中に置く。人の敢へて之を取らず。世に傳ふ。城は高麗の尹瓘の築く所なり。西は先春嶺と六十里許りなり。)

・朝鮮(조선) … 『龍飛御天歌』第八十四章の註に次のようにある。「朝鮮。有朝日鮮明之意。是合於早明之識焉。」

【現代語訳】 南京。鍾城府の江北に近い場所にある。潼関鎮より豆満江を渡り、甬青浦を経て舍春川を渡ると、古城があり、南京と号す。その西北にまた山城が有る。地名は調べる事ができないが、『元志』を調べると、開元府の西南を寧遠県と言い、また西南を南京と言う。又た南を哈蘭府と言う。哈蘭とはすなわち今の咸興である。開元とは古の挹婁勿吉である。開元城と三萬衛もまた扶餘の古国であり今は寧古塔の境に属す。扶餘は檀君の裔であり、挹婁勿吉もみなその部族であるので、これらの地は朝鮮であることは間違いない。思うに高麗の境界は先春嶺で終わりになるが、南京、巨陽は皆その境内にあるからである。

(三三)

【正文】 縣城。自鎮北堡渡會叱家川。大野有土城。名曰縣城。按龍飛御天歌、奚關城東距後春江七里。西距豆満江五里。疑是。

【和訓】 縣城。鎮の北堡より會叱家川を渡る。大野に土城有り。名を縣城と曰ふ。龍飛御天歌を按ずるに、奚關城は東は後春江と距たること七里。西は豆満江と距たること五里。疑ふらくは是なり。

【釈語】

・會叱家川(회질가천) …『勝覽卷之五十(慶源)』第二一頁に「在府南一里。源出甌山。東流入豆満江。」とある。
・奚關城(해관성) …『龍飛御天歌』第三章註に次のようにある。「奚關城。東距薰春江七里。西距豆漫旱坦江五里」。ここにある「薰春江」は正文中の「後春江」と同一を指すと思われる。

【現代語訳】 縣城。鎮の北堡より會叱家川を渡る。大野に土城が有り。名を縣城と言う。『龍飛御天歌』によれば、奚関城は東は後春江と七里の距離にあり、西は豆満江と五里の距離にあるという。どうやら奚関城がそれではあるまいか。

(二四)

【正文】先春嶺。在今會寧府豆滿江北七百里。古公嶮嶺及巨陽城西六十里。直白頭山東北。有蘇下江。出白山。北流歷公嶮嶺先春嶺。至巨陽。復東流百二十里至阿敏。入于海。公嶮。南隣貝州探州。北接堅州。此三州。似是渤海及遼金古邑名。以東史考之。三韓之際。曷思王所居。曷思水者。疑今蘇下江也。高麗尹侍中拓地至此。城公嶮嶺。遂立碑於嶺上。刻曰。高麗之境。碑之四面有書。皆爲胡人剝去云。

【和訓】先春嶺。今の會寧府豆滿江の北七百里に在り。古の公嶮嶺及び巨陽城の西六十里なり。白頭山の東北に直る。蘇下江有り。白山より出ず。北に流れて公嶮嶺先春嶺を歴し、巨陽に至る。復東流すること百二十里にして阿敏に至り、海に入る。公嶮。南は貝州探州に隣し、北は堅州に接す。此の三州、是れ渤海及び遼金の古邑名に似る。東史を以て之を考ふるに、三韓の際、曷思王の居する所なり。曷思水なる者は、疑ふらくは今の蘇下江なり。高麗の尹侍中地を拓き此に至る。公嶮嶺に城く。遂に碑を嶺上に立つ。刻みて曰く。高麗の境なりと。碑の四面に書有り。皆な胡人の剝ぎて去るなりと云ふ。

【釈語】

・先春嶺 (선춘령) … 『新增東國輿地勝覽』(卷之五十 會寧) (三四頁) に次のようにある。「先春嶺。在豆滿江北七百里。尹瓘拓地至此。城公嶮嶺。遂立碑於嶺上。刻曰高麗之境。碑之四面有書。皆爲胡人剝去」。同じ文は『世宗實錄』(地理志 咸吉道吉州牧慶源都護府) にも見える。

・公嶮嶺 (공험진) … 『新增東國輿地勝覽』(卷之五十 會寧) (三四頁) に次のようにある。「自高嶺鎮渡豆滿江。踰古羅耳。歷吾童站、英哥站。至蘇下江。江濱有公嶮嶺古基。南鄰具州、探州。北接堅州。○按高麗史地理志。公嶮嶺。睿宗三年築城置鎮。爲防禦使。六年築山城。注一云孔州。一云匡州。一云在先春嶺東南白頭山東北。一云在蘇下江邊。今既以慶源爲孔州。則恐在先春嶺東南、白頭山東北、蘇下江邊者。爲是。然未可考。又地理志。通奉、平戎、宗寧、眞陽等鎮。皆睿宗三年築城。四年撤城還女眞。其地面。今亦未可考。」(和訓…高嶺鎮より豆滿江を渡り、古羅耳を踰へ、吾童站、英哥站をを歴て蘇下江に至る。江濱に公嶮嶺の古基有り。

南は具州、探州に鄰し、北は堅州に接す。○高麗史地理志に按ずるに、公嶮鎮、睿宗三年城を築きて鎮を置き、防禦使と爲す。六年山城を築く。注、一に孔州と云ふ。一に匡州と云ふ。一に先春嶺の東南、白頭山の東北に在りと云ふ。一に蘇下江邊に在りと云ふ。今既に慶源を以て孔州と爲す。則ち恐らく先春嶺の東南、白頭山東北、蘇下江邊に在る者、是れ爲り。然るに未だ考ふる可からず。又地理志。通奉、平戎、宗寧、眞陽等鎮。皆睿宗三年に城を築く。四年城を撤し女眞に還す。其の地面、今未だ亦た考ふる可からず。

・東史(동사) … (中国から見て東の国という意味で) 朝鮮の歴史。

・曷思王(갈사왕) … 東扶余第二代国王金蛙王(高句麗建國神話に現れる伝説上の人物)の第三子。兄弟に東扶余第三代王の帶素、高句麗の初代王東明聖王(朱蒙)がいる。紀元二二年、帶素王が高句麗の第三代君主大武神王率いる軍により撃殺される。帶素王の死後、帶素の末弟が数百人を率いて鴨綠谷に脱出し、曷思水の河畔で新しい国を作つて即位し曷思王と名乗つたとされる。

・曷思水(갈사수) … 「曷思」という地名は不詳である。

【現代語訳】 先春嶺。今の會寧府豆滿江の北七百里のところにある。昔の公嶮鎮および巨陽城の西六十里である。白頭山の東北にあたる。蘇下江という川があるが、白山から出ている。北に流れて公嶮鎮先春嶺を経て巨陽に至る。そしてふたたび東に流れて百二十里にして阿敏に至り海に入る。公嶮。南は貝州探州に隣接し、北は堅州に接している。この三州は渤海および遼金の古の邑名のように思われる。東史(朝鮮史)の観点からこれを調べたところ、三韓の際、曷思王が居た所である。曷思水とは、おそらくは今の蘇下江であろう。高麗の尹侍中が北地を開拓してここに至り、公嶮鎮に城を築き、遂に碑を嶺上に立てて、高麗の境と碑に刻んだ。碑の四面に字が書いてあったが、全て胡人(女真)に剥がされてしまったという。

【解説】 古の高麗と女真の定界碑が建てられたとされる「先春嶺」については、現在もまだその正確な位置はわかっていない。朝鮮後期の文臣許穆(二五九五〜一六八二)の著した『眉叟記言』卷三十「邊塞」に先春嶺について以下のような記述が見える。

東女眞。靺鞨遺種。高句麗部落。地方三百里。東極于海。西至蓋馬山。南接于長、定二州地。本高句麗舊地。高麗肅宗十年。女眞數寇邊。將大發兵討之。肅宗歿。睿宗立。二年秋。以尹瓘爲大元帥。吳延寵爲副元帥。發十七萬衆。擊破女眞部落。定疆域。東至火串嶺。北至弓漢嶺。西至蒙羅骨嶺。并所侵之地。鐵嶺以北千餘里。置九城。曰咸州。曰英州。曰雄州。曰吉州。曰福州。曰宜州。曰公險鎮。曰通泰鎮。曰平戎鎮。爲北界。咸州。今咸興府。英州在蒙羅骨下。雄州在吉州火串嶺下。福州古禿魯兀。今端川郡。宜州在定州南。公險鎮在會寧府蘇下江濱。先春嶺東南豆滿江北七百里。三年。立石記功於先春嶺以爲界。(和訓…東女眞。靺鞨の遺種にして、高句麗の部落なり。地は方三百里(約一二七、六キロ)にして、東は海に極り、西は蓋馬山に至り、南は長(州)定(州)の二州の地に接す。本は高句麗の舊地なり。高麗肅宗一〇年(一一〇五年)、女眞數邊を寇し〔侵略して財物を奪う〕、將に大いに兵を發し之を討たんとす。肅宗歿し、睿宗立つ。二年秋(睿宗二年、一一〇七年)、尹瓘を以て大元帥と爲し、吳延寵を副元帥と爲し、十七萬の衆を發し、女眞部落を擊破し、疆域を定む。東は火串嶺に至り、北は弓漢嶺に至り、西は蒙羅骨嶺に至り、并びに侵した所の地は鐵嶺以北の千餘里なり。九城を置く。曰く咸州、曰く英州、曰く雄州、曰く吉州、曰く福州、曰く宜州、曰く公險鎮、曰く通泰鎮、曰く平戎鎮。北界と爲す。咸州。今の咸興府なり。英州は蒙羅骨下に在り。雄州は吉州の火串嶺下に在り。福州は古禿魯兀、今の端川郡なり。宜州は定州の南に在り。公險鎮は會寧府、蘇下江濱に在り。先春嶺の東南は豆滿江の北七百里なり。(睿宗)三年、石を立て功を先春嶺に記し以て界と爲す。

引用文献

- 1 『元史』(一九七六年中華書局發行、点校本)。
- 2 『龍飛御天歌』(一九七三年亜細亞文化社發行、萬曆四〇年刊本の影印)。
- 3 『龍飛御天歌』一〇卷。跋末「正統十二年(中国・明 一四四七年)二月 日朝奉大夫集賢殿扈 教芸文忠 教知製 教世子右弼善兼左中護臣崔恒拝手稽首謹跋」京都大学電子図書館貴重資料画像による。

- 4 金宗瑞撰、李鎰増補（顯宗一一（一六七〇）年刊）『制勝方略（増補）』国会図書館デジタルコレクションによる。
- 5 魏昌祖選『北道陵殿誌』（英祖三四（一七五八）年刊）大阪府立図書館附属中之島図書館韓本コレクション画像データによる。
- 6 洪良浩選『海東名將列傳』（純祖一六（一八一六）年刊）四宜堂。駒沢大学電子貴重図書画像データによる。自序は「甲寅仲春耳溪洪良浩序」（一七九四）。
- 7 金魯奎撰『北輿要選』（一九〇三）京城・朝鮮古書刊行会、一九一一發行。
- 8 高士奇撰『扈從東巡日錄』二卷附録一卷、一六八二（康熙二一）年刊。国会図書館デジタルコレクション画像データによる。
- 9 『大清一統志』（景印文淵閣四庫全書 第四八二冊、台灣商務印書館發行、一九八四）。

参考文献

- 1 咸鏡北道地方課編（一九二六）『咸北要覽・附間島瑣春』会寧印刷所發行。
- 2 京都大学文学部東洋史研究室編（一九六一、一九六七改訂増補）『改訂増補 東洋史辞典』東京・東京創元社。
- 3 韓国教員大学歴史教育科編、吉田光男監訳（二〇〇六）『韓国歴史地図』東京・平凡社。